

太郎

茅々斎かちかち 著

## 第一回 出会い

〈これは携帯電話をもつのが中学生ではまだまれであった世紀の境目のころの物語〉

**学校**の席に着いた。ここにきただけで大きな仕事をなしとげた気がする。  
——ほっ。

四月。新しい学校での新学期が始まって四日目。へとへとだ。でもこれで  
金曜日。明日は休みだ。

先生が出席をとり始める。

今日はとりあえずこれでよかったことにしよう。学校にこられたんだもの。  
あとは帰るまで、とにかくここにいればいい。

「山本！」

——えっ、ぼく？

ちよっぴりあわてる。

山本というのがぼくの苗字だ。山本太郎。平凡な名前だ。

だって、ぼくを呼ぶ前に、先生は平川くんを呼んでいた。平川くんの次は山田くん、その次がぼくなのだ。先生は山田くんを抜かした。

「はい」

少しおくれて声を出す。

山田くんという人は一学期が始まってから一度も学校にきていない。

ぼくは転校してきたばかりの中学二年生だ。クラスにどんな人がいるのかまだほとんどわからない。そのうちわかるようになるかもしれないし、ずっとわからないかもしれない。わからなくてちつともかまわない。

山田くんはなぜこないのだろう。

前の学校でのぼくと同じようなのだろうか。前の学校の教室でも、ぼくの名前は飛ばされていたのだろうか。ずっと行ってなかったから。

前の学校のこととは思いついたくない。

二時間目にいやなことがあった。英語の時間だ。

先生が一人ずつ順にちよつとした質問をした。一年の復習で、ぼくもなんとか答えられた。

立ったまま返事のできない子がいて、授業が止まってしまった。教室はしんと息苦しくなった。

先生はその子の机のはじっこをトンとたたき、いらつとした感じで、

「はい、じゃあ次。ミズ・マリーはいいからすわって」

加藤麻衣さんだ。名前を覚えた数少ない一人だ。ほかの子とちがう感じがするからだ。

先生は加藤さんに向かって、

「しっかりしなさいね」

といった。

ぼくはどきんとした。

口調がそっくりだった、あの人に。

あの人はあのときにもそういった。ぼくは川べりのベンチで本を読んでいた。そこにあの人が急に現れた。本の上に影ができたので顔を上げたら、あの人がいたのだ。あんなところにあの人がいるはずがなかった。ぼくだっているはずがなかったのだけれど、でもそれはいつものことだった。平日の昼前で、学校に行っていなければならなかったし、あの人は仕事でなおさらいるはずがなかった。「何をしているの。こんなところで」。あの人はいった。

ぼくは本をぱたんと閉じた。「勉強だよ」。あの人は顔をこわばらせ、じっと見下ろした。ぼくは本をカバンに押し込み、さっと立ち上がり、あの人をおしのけて歩きだした。そしたら、ぼくの背中にあの人があった。「しっかりしなさいね」。それは、あの人の口癖だ。「**し**っかり**し**なさいね」と、ふたつの「し」の字をとくに強くいう。

それと同じように英語の先生もいった。あの人の声をありありと思い出した。あの人というのは、つまり、ぼくの姉の母親だ。

午後は授業がなかった。一年生たちのクラブ見学だ。先生はこの機会にどこかのクラブにはいるといいといってくれた。はいる気はない。どうせうまくいかない。

昼食をすませると、目立たぬようにカバンを抱えて校舎の外に出た。海のかおりがする。

校庭のほうに飛び出して行く生徒とは反対に、校門に向かう。授業がないからといって帰っていいというのではない。そんなことはどうだっていい。あたりをちらっとみて、だれもないのを確かめる。

校門の狭いすきまからするりと出る。

——これで今週は終わり！

大きな桜の木から花びらがはらりと落ちてくる。学生服の肩に一枚のる。それをつまみあげる。まだ残っていたのか。不意に鼻がツーンとする。

小さいころには家族でお花見をしたこともあった。もう忘れたけれど。

——急いで学校から離れよう。

「おおい、山本くん」

うしろから大きな声がする。

——だれ？ さつき一人もいなかったのに。

ぼくは気が付かないふりをして、すたすた歩いて行こうとする。

どすどすと足音が迫ってくる。走って逃げようかと思いうちに、どんと突き当たってきて、背中をかかえこまれ、

「いっしょに帰ろうぜ」

身をすくませる。

「ぼくも抜け出してきたのさ。そしたら、きみがいたから、ちよつとびつくりしてさ、おっかけてきたんだ」

というのを見ると、坊主頭の大男だ。この子はとにかく目立つから名前は知っている。島崎くんだ。

学校に連れもどされるわけではないようなので、少し安心する。

島崎くんは目をぐりぐりさせて、

「山本くんのうちはどこだい」

なんとなく答えたくない気がして、

「ええと」

口ごもっている、島崎くんは、

「ぼくの家は寺なんだ。ほら、校門を出てき、国道をまっすぐ行くと、古い和菓子やさんがあるだろう。お虎最中というのが名物さ。名物っていったってさあ、あんまりうまいとは思わないんだけどさ、そこを左にはいったところなんだ」

「へえ、そうなんだ」

とりあえず答える。

きたばかりのこの町でわかるのは、駅と家と学校と、それに畑のあるあたりだけだ。和菓子やさんなんてぜんぜん知らない。

島崎くんの太い腕が肩にどかんとおっついて、苦しくてならない。

大きな松の木の先にサビついた歩道橋があつて、その階段の前までとにか



くがまんしていると、島崎くんは腕をほどいてくれて、さつとぼくの前に出て、一段おきにあがって行く。島崎くんの大きなお尻で狭い階段はいっぱいだ。

ぼくはふつうに一段ずつのぼる。島崎くんがそのまま先に一人で行ってくられたらいいと思う。

のぼって行くと、たくさんの松がみえるようになる。東海道の古い松並木なのだそうだ。これを見ると、どうして自分がここにいるのだろうかと思議な感じがする。

島崎くんは上で国道をみおろして立っている。

——行ってくれたらよかったのに。

それは口に出さずに、

「ぼくは線路の向こうなんだ」

だから、いっしょに帰ったりしないという意味のつもりだ。

「そうか。山のほうか」

島崎くんは歩き出す。

「線路をくぐってちよつと北のほうなんだ」

島崎くんのお寺とは方向がぜんぜんちがうということをしる。さらにアピールする。

「じゃあ神社のへんか。それとも、大タブのあたりか。こんど行くからな」  
——こなくていいよ。

島崎くんはおるときも一段おきだ。ぼくはゆっくりとおりる。島崎くんは下で待っている。ぼくはその後ろをすり抜けて線路のほうに行こうとする。だまって行ってしまおうか、それとも「さようなら」くらいはいったほうがいいかと思っていると、島崎くんはぐいとぼくの腕をつかむ。

「ちよつと、うちに寄っていかないか」

「えっ」

すぐに走って行けばよかったと後悔する。

「ぼくのことをさ、みんな線香くさいっていうんだぜ。うちにくるとき、た

しかにくさくなるらしいんだけどな。どうかなあ、やっぱ、くさいかなあ」  
島崎くんは、くんくんと自分の肩のあたりをかぐ。別にくさいとは思わな  
い。

「うちにはお墓があつてさ、お化けが出るって、昔からいわれているんだ。  
くさくてこわくて、くさこわだから、みんなきたがらないのさ」

島崎くんは大きな声で笑う。

ちつともおかしくなかったけれど少しだけ笑いかえす。

島崎くんは腕をつかんだまま放さない。

家に帰ったところで何も無いから、行つたつて悪くはないのだけれど、こ  
んなずうずうしい感じの子とはとにかくいっしょにいたくない。

「だからさ、ここを、まっすぐに行けばいいんだ」

「そうなの？」

ぼくは「いやだ」とはいえず、腕をつかまれたまま、ひきずられるように  
していっしょに歩くようになる。

「山本くんは、どっから引越してきたんだっけ？」

「東京だけど」

最初の日に、みんなの前で自己紹介をやらされた。いやいや小さな声でしゃべった。

「東京かあ。東京といたって広いよなあ。どこだっけ？」

東京のことは思い出したくない。

「お台場のちよつと北あたり」

あいまいに答える。

「高層マンションに住んでいたっていったよね。ものすごく眺めがいいんだろ。夜景がとつてもきれいだって」

「そうだけど」。

あたりさわりのないそんなことをしゃべったのだった。

「うちの墓場の夜景もいいぞ。火の玉が出てきてさ。こんどみにきなよ。で、なんでこんな田舎にやってきたの？ やっぱ、お父さんの転勤？」

そんなことはだれにもいいたくない。

「まあ、そんな感じだよ」

「いいよなあ、引つ越せるなんて。ぼくなんかさ、きつと一生、この町にいるんだ。うちの寺で坊主をやってるよ、死ぬまでね。やっぱ、うちのじいさんがそうだったし、親父さんもそうなるだろうしね。もうぼくの一生はわかっているんだ。おもしろくない。まったく。こんちくしょう！」

島崎くんは大きな声でどなり、そのはずみでぼくは振り回されて、よろけてお店のショーケースに肩が当たってしまった。

ぬっと、おばさんが上から首を出してくる。

「ごめんなさい」

あわててあやまると、おばさんは島崎くんに向かって、

「おや、太郎和尚さんなのかい。あいかかわらず元気がよすぎるよ。だいじょうぶなのかい」

そういえば、島崎くんも太郎というのだった。

「ごめん、ごめん」

島崎くんはぼくを引き寄せて、ショーカーをさすり、

「だいじょうぶ。割れたりしていないさ」

「あたしは、その子がだいじょうぶかって」

「ぼくは平気です。でも、ごめんなさい」

「タンおば、こんど新しくきた転校生なんだ」

島崎くんは、ぼくをぐいと持ち上げるようにしてお店のおばさんにみせる。

ぼくはなされるがままに、

「こんにちは」

と、あいさつする。

「はい、こんにちは。おやおや、こちらは太郎和尚さんとちがつてかわいらしい子だねえ。それに、太郎和尚さんとちがつてスマートだねえ。それに、

太郎和尚さんとちがつて利口そうな顔だねえ。それに、太郎和尚さんとちがつて」

「なんでも愚僧とはちがうんだね」

「太郎和尚さんのような根っからのガキ大将と同じだったらこまるよね」  
おばさんはぼくに笑いかける。

「山本くんといつてさ、東京から引越してきたばかりだつて」

「そうなのかい。太郎和尚さんと仲良くするといいよ。こうみえたつていい子なんだから、ほんとはね。そうそう、ちようどいま揚げたばかりのコロッケがあるから、お近づきのしるしにプレゼントしましょうかね」

おばさんはコロッケを紙に包んでさしだしてくれる。

「でも」

「食べておいしかったら、今度は買いにきてくださいね」

「まずかったら、二度とこないわけだ」

と、島崎くん。

「うまいかまずいか、ためしに太郎和尚さんも食べてみたらいいわよ」  
おばさんはもうひとつコロッケをさしだす。

「愚僧は遠慮はしない。では、ご報謝、頂戴つかまつろう」

島崎くんは目札をして受け取り、ばかりと、大きなコロツケの半分ばかりを口にほおりこむ。

「うーん、うまい。極楽、極楽！」

島崎くんは、ぺこりと頭をさげると、そのまま歩き出す。

ぼくもおばさんに頭をさげ、なりゆきで島崎くんの後を追う。

「山本くんも食べたらいい。あそこの店はさ、おばさんは気前がいいけど、おじさんはけちんぼだな。おじさんが何かくれたためしなんか無いもの。今日は、おばさんでラッキーだったよ」

ぼくはひと口食べてみる。温かくておいしい。

島崎くんは残り半分を口にほおりこむ。

コロツケをもぐもぐしていると、島崎くんにむりやり連れてこられていやだった気分が少しだけ薄れてくる。

「さっき、おばさんのこと、なんか呼んでいたでしょう？」



「あのおばさんはさ、タンおぼっていうんだ。どうしてかっていうと、うちの親父さんの大好物が牛タンで、おばさんがいつも配達してくれるからさ」  
島崎くんは大きな声で笑う。

別におかしくもないけど、ぼくは少しだけ笑う。

古いつくりの店があつて、木の看板に「名物お虎最中」と書いてある。これがさつきいっていた和菓子さんだろう。

ここで島崎くんは細い路地にはいる。なんとなくなくなつかしい感じがする。

「奥がうちの寺だよ。西念寺っていうんだ」

ぼくは急に思い出す。

「あのね、ちょっと教えてほしいんだけど」

——あれ？

ぼくは何を言い出したのだろう。

「えっ、なんだい？」

島崎くんが振りむく。その大きな目をみて、気持ちちがひるむ。

——どうして教えてほしいなどといったのだろうか？

でも、

「あのね。わからないことがあるんだけど」

——あれ？

ぼくはなぜか聞こうとしている。

「わからないことか。なんでもきいてくれ」

島崎くんは胸を張る。

こうなったらもう思い切っていうしかない。

「あのね、山田くんという人のことなんだ。どうして学校にきていないの？ 今日、先生は山田くんのことを呼ばなかったでしょう」

「山田くんのことか。うーん」

島崎くんは腕組みをする。

——聞いてはいけないことなのか。

やっぱり前のぼくと同じなのだろう。何となくそう感じていたもの。

島崎くんは目をぐりぐりさせてぼくをみつめる。

「よし、きみならいいような気もする。本堂にちよつと寄つて行つてくれな  
いか。それで考えるからさ、それからにしよう」

島崎くんはお寺の門をくぐる。

「あつ、太郎！ 帰つてきた」

なかから女の人走り出てくる。小柄な人だけど、たぶんお母さんなのだ  
ろう。

「いま学校に迎えに行こうとしていたんだけど」

「えっ？」

「だめだったんだよ」

「ほんとに？」

お母さんはひどく悲しそうな顔をする。

島崎くんの背中がぐらつく。

「もうそのうちお宅にもどるでしょうから、行ってさしあげて」

島崎くんはしゃがんでしまう。

お母さんはほくに気づいて、

「お友だちですか？」

「はい、山本といいます」

ぼくはお辞儀をする。

島崎くんは立ち上がり、

「ごめん。きてもらったんだけどさ」

島崎くんは手の甲で目をぬぐっている。

何か事情があるらしい。

「ぼく、これで帰ります」

「あのさ、まだ知らないだろうけど、伊藤さんのお姉さんなんだ」

「伊藤さん？」

「ぼくらのクラスの伊藤さんさ」

そういえば、伊藤さんという、やっぱりずっと休んでいる子がいる。

島崎くんはふいとかけて行ってしまふ。

「ごめんなさいね。こんどまたゆつくりきてください」

お母さんも島崎くんを追ってなかに行ってしまふ。

ぼくは門から外に出る。手にはコロツケがまだ残っている。これをどうしたらいいのか、ここからどう帰ったらいいのか、道でぐずぐずしていると、島崎くんが走り出てくる。

「くわしいことは今度話すけどさ、山田くんはさ、いないことになっているんだ。でも、いいやつだよ。それはまちがいない。じゃあ」

早口でそれだけいうと、すぐにまた行ってしまふ。

——何なのだろう？

ぼくがぼんやりその背を見送っていると、頭の上で、

「カー」

カラスが鳴く。

**家**に帰りつくと玄関がしまっている。

叔父さんの家だ。親父の弟だ。

ぼくはカギをもっていない。叔父さんがいつもいるので、カギがなくても困らない。叔父さんは、ぼくが午後も学校にいますと思っていて、どこかにかけているのだろう。

しばらく外に突っ立っていて、叔父さんはすぐにはもどってきそうもないので、ほかにすることもなく、自転車を引っ張り出す。これは、ぼくのために叔父さんがもらってきてくれたものだ。昨日きたばかりで、ちゃんと乗るのは初めてだ。

家の前の道はとても狭い。自転車にまたがると、生垣とブロック塀にはさまれてからだがすれてしまうくらいだ。

がたがたと細い道から出ると、舗装された広い道になる。向かいにコンクリート二階建てのアパートがあつて、その後ろ側が線路だ。東海道線というやつで、東京まで一時間以上かかる。

自転車をこぐとからだがちよっと熱くなってくる。真黒な学生服の上着を脱ぐ。東京ではこんな窮屈なものには着ていなかった。叔父さんがやつぱり中古をもらってきてくれたんだ。

しばらく行くと家並みが途切れ、ビニールハウスがあつて、畑が広がる。その先の小高い丘の間の谷のようなところに、ちよつとした広さの畑を叔父さんが借りていて、一度、連れて行つてもらつたことがある。

叔父さんはその畑にいるかもしれないと、右に曲がつて、ゆるい坂道を一生懸命にこぐ。

また不思議な感じがしてくる。

——どうしてぼくはここにいるのだろうか？

ずっと都会で暮らしてきた。だから、林や畑の広がるこんな道を自転車で走ることなんてなかった。

——あれ？

何かちがうような気がして自転車を止める。見回して、叔父さんの畑があ

るような感じがしない。こんな田んぼはなかったようだ。

——曲がるところをまちがえたのか？

自転車からおりる。

あたりにだれもない。東京にはどこでも人がたくさんいた。

田んぼの縁にむらさき色の花が咲いている。どこかで鳥が高い澄んだ声で鳴いている。風がそつと顔にあたる。鼻がツーンとする。

「ちきしょう！」

目をぬぐうと手の甲がぬれている。

空が真っ青だ。まぶしい。

「ちきしょう！」

ほほに涙がつたわる。

「ちきしょう！」

田んぼに暖かな日がさしている。

「カー」



カラスが鳴く。

この町にきて九日だ。つまり家族がばらばらになって九日ということだ。とつくにばらばらだったのだけだ。

三月の最後の日にマンションを明け渡した。親父はずっと前からいなかった。ぼくと姉が、あの人のアパートに行くことになっていた。引越し屋さん最後の荷物を運び出してもらって、ぼくはカバンだけをもって部屋を出た。姉は管理人室にカギを渡しに行った。チャンスだった。姉の背中に、「ばいばい」と、聞こえないようにいうと、すぐに走った。広い通りを、自動車の間を無理に突っ切り、商店街を抜けて古い町並みの狭い道にはいり、さらに走った。川向こうの駅で地下鉄に乗り、そして、この町にきた。

「消えてなくなれ！」

ぼくの声があたりに響く。涙をぬぐう。

足元に石の碑がある。

「谷津観音入り口」

そこから林のなかへと通じる細い道がある。なんとなく行ってみようかという気になる。

細い道になぜかひかれる。東京で学校に行かなくなつてからあちこちに行つた。細い路地があつたりするとよくはいつてみた。段ボール箱を並べた八百屋があつたり、ガラスの引戸の駄菓子やがあつたり、軒下に植木鉢を並べた古い家があつたりして、一番奥に小さな神社があつたりすると、なんだかほつとして、その石段に腰をおろして、ぼんやりしたり、本を読んだりしたのだった。

高層マンションが立ち並ぶあのあたりが好きでなかった。

自転車を残して、土の道を歩く。ほかほかとやわらかい。

大きな木が倒れている。その枝先に花がついている。桜だ。木が倒れてもまだ花は開いている。

「かわいそうに」

つぶやいて、すぐに恥ずかしくなる。桜をかわいそうなんていえるほどではない。

道は小さな石段で終わる。

のぼった先は岩の壁で、下のほうに高さ五十センチくらいの口がぽっかりとあいている。しゃがんでなかをのぞく。

真つ暗だ。かすかに線香のにおいがする。このなかに観音様が置かれているのだろう。

ちよつとこわいけれど、はいつてみようかと、しゃがんだまま前に進んでみる。からだがつっぱりと穴のなかにはいる。ひんやりとした空気に包まれる。

頭の上が軽くなったような感じがする。どうやら思ったより広いらしい。目が慣れると、ぼうつとみえてくる。岩をくり抜いたなかに、檀があつて、その上に観音像があり、下にお賽銭箱がある。

とりあえず手を合わせる。神社や寺ではいつもそうする。信仰心があるわ

けではないけれど、ただ、そうするのが好きなんだ。なんとなく安心するかなのかもしれない。

お金はもっていないので、お賽銭箱に入れるものはなく、その前で足を抱えぎゆうつと小さくなる。

「消えてなくなればいいんだ」

ぼくはつぶやく。

頭を膝の間に入れる。

外の音が聞こえる。かさかさと枝がすれ合い、鳥の声がして、電車が走る音もする。

——このままじいっとしていよう。

そうする間に、どんどん時間がたってしまったらしい。一日、一週間、一カ月、一年……。どんどん時間がたってしまうんだ。何年、何十年と過ぎて、木がどんどん大きくなって、ここはもう奥深い森だ。ぼくはだれ一人知らないままに年老いて行く。

「ちきしょう」

まぶたの裏に涙がにじむ。

——そうだよ、だれ一人知らないんだ。

あのころの気分と同じだ。

ぼくはコンクリートの壁に囲まれていた。壁は薄いけれども硬い。ぼくの中からだをびったりおおっている。だから動けない。声も出せない。外からの声もこない。その壁のなかでぼくは窒息してしまう。そしてぼくはコンクリートの壁になってしまふ。壁のなかには何も無い。

どうやって死ぬのか決めていた。

東京湾を巡る船に乗るんだ。もちろん夜がいい。船のデッキに立って、海の向こうの都心の夜景を眺める。もやに溶け込むような東京タワーの姿を目におさめる。大勢の乗客たちが、華やかなディナーを食べにまわりからいなくなったらぼくは飛びおる。海にぐいとすいこまれ、暗い暗い東京湾の底へと沈んで行く。ぼくが死んだことなどだれも気がつかない。

「ちきしょう」

顔を上げる。

「消えてなくなれ！」

穴のなかにぼくの声が響く。それがこわい。

檀の上にローソクと線香とマッチが置いてある。シュツと擦ってみる。ボツと火がつく。

穴のなかが赤くなる。

ぼくはびくつとする。マッチが落ちて火が消える。

——だれかがいる！

右側に何かみたような気がして、でも目を向けられなくて、じりつと後ずさりしながら、

「だれ？」

上ずったぼくの声が響く。

「おお」

声がかえってくる。

「おれがみえるのか」

後ろにのけぞってお尻をつく。

「だいじょうぶだよ、逃げなくても」

ゆらりと影が動き、

「おれは、人をとって食ったりしない」

さがろうとしてもからだが思うように動かない。夢でこんなふうになることがよくある。

「こわがらなくていい。おれは、ただのカラスなんだから」

「カラス？」

やっどぼくはいい、そしてずるつと後ろにさがる。

影がまたゆらりと動いて、外からはいつてくる光のへりにくる。

「だって、人間なのでしょう？」

ぼくの声はふるえている。

「もともとは人間だったけど、いまはカラスだ」

声の感じからすると少年のようだ。

「でも、人間でしょう？」

「きみにはそうみえるらしいな。それで驚いたのさ」

急に笑う。ぼわんぼわんと響く。

「カラスといったって、ちゃんとしゃべっているじゃないか」

「いや、おれは、ただ、カー、カーと鳴いているだけだ。きみが勝手にしゃべっていると思っっているんだ」

「そんな」

ぼくはからだを横にずらす。なかにはいつてくる光が増えて、その人がみえやすくなる。ぼくとそれほど変わらない少年だ。

「ほら、人じゃないか」

「きみにはそうみえるのだろうか、おれはカラスなんだ。ふふふ、いまはね」

「いまは？」



「さつきもいったように、おれも、もともとは人間だったのさ。そうだな、四年前まではな」

「四年前？」

「そのころは、おれは小学生をしていたんだ」

ならばぼくと同じくらいの年齢だ。

「はははは、もう昔のことだ。Once upon a time おれが人間だったのは、

ランドセルをしょっていたとき。その背中にいまは翼がある」

翼？ そうはみえない。どうみてもふつうの少年だ。

「頭がおかしいと思っっているんだろう？」

少年は声を低め、そして笑う。

「あははははは」

声が穴のなかで反響する。

ぼくは逃げるように外に出る。少年の笑い声が耳から離れる。くらくらと

するほどまぶしい。

少年も出てくる。

ぼくよりもきゃしゃなからだつきだ。おでこが大きくて、どちらかといふとかわいい感じの顔だ。穴のなかでの不気味な印象とはまるでちがう。

「おれが人間にみえるかい」

ぼくはうなずく。

「そうか。きみにはみえるのか」

「だって、あたりまえじゃないの？」

「あたりまえ？ あははは、おれはカラスなんだ。だから、ふつうはおれは人間にはみえないんだ」

「そんなの、わからない」

「きみにみえる理由がおれにはわからない」

「どういうこと？」

「さあ。どういうことかな。だけど、きみとは話ができそうな気がする。さつき『消えてなくなれ！』といっただろう。Once upon a time おれが人間

だったのは、ランドセルをしょっていたとき。おれもそうだったのさ」

「だれなの、きみは？」

「だからカラスだよ」

「ちがうよ。人間だよ」

「昔はね」

「いまは？」

「だからカラス。何回いってもおんなじだ」

少年が目をくりくりつとまわしたのが、なんとなくおかしくみえて、ぼくはくすくすと笑う。

「笑ったね。ははは、きみはさっき泣いていただろう。やっと笑った。実は、おれも泣いていたんだ」

「穴のなかで？」

「ああ、とっても悲しいことがあったものだから、泣かずにはいられないのさ。でも、今日はちよつと話をしすぎた。また今度会おう。きっとすぐに会

うことになるさ。じゃあな」

少年はさつとかけ出す。

ぱたぱたと羽ばたきの音がして、少年の姿は消える。

第二回 黒ネコ

次の日の朝。

「太郎、おきろ！」

いつもの叔父さんの声だ。叔父さんは、ぼくがおきて台所に行くまで何度も叫ぶ。近所に丸聞こえだ。それがいつもだ。

「叔父さん、今日は、土曜日だよ」

台所にはいりながら、ちよつと文句をいう。

「そうだ、今日は土曜日だ。そのことに何の異論もない。この田舎町だつて、幸いにも土曜日はくるのであつて、今日が土曜日ということによもや不都合はあるまい」

叔父さんは朝ごはんのしたくをしている。

「だから休みなの」

「ほう、休み？ 何が？」

「学校」

「ほう、それで？」

「だって、まだ六時半でしょう」

「いつもの時間ではないか」

その通り、いつもの時間だ。

叔父さんの家に来たのは三月三十一日だった。その日、叔父さんはべらべらしやべり続け、夕飯が七時に終わって、八時になったとたんに、「わしはもう寝るからな。で明日は何時におきるんだ？」といった。何の気なしにそれまでがそうだったので、「六時半かな」と答えた。次の日、叔父さんは、六時二十九分に「太郎、おきろ！」と大きな声でどなった。それから毎日同じなので、さすがに四日目からは、叔父さんがどなる前の六時二十八分にはおきるようにしていた。しかし、今日は土曜日で油断していたのだ。やっと休みになったので、寝坊したい気もあった。

叔父さんは、これまたいつものようにべらべらしゃべり始める。

「そもそも土曜日とだな、たとえば月曜日とどこにちがいがあのか？ きみは知っているかな。むろん、きみは知らない。当然である。どこにもちがいないのだから、知っているというほうが無理なのである。土曜日も月曜日もみな同じ一日で、少しも変わらない。これは時計の曜日をセットしまちがえて、世間でいう火曜日に自分の時計が木曜日になっていたところ、生命になんら異常をきたすことも、天体の運行になんら支障をきたすこともないことから簡単に証明できるわけだ」

叔父さんと暮らすようになってすぐにわかったのは、叔父さんのおしゃべりは真面目に聞かないほうがいいということだ。意味がわからないことを延々と並べるので、疲れてしまう。

ぼくは洗面所に行く。叔父さんは聞いていようがおかまいなしにしゃべっている。

「しかしだ、旧約聖書か何かにある、天地創造の話によれば、神様は月曜日

から仕事を始めて、日々、創造の仕事のメニューを変えて、あれをつくったり、これをつくったり忙しくして、土曜日の晩までにはあらかた終えたので、やれやれ、日曜日は休みにしようということになったのだが、近ごろは世間では土曜日も休みになったようだから、神様も、いま天地創造にとりかかるとしたら、六日の仕事を五日で仕上げられるよう手際よくしなければならぬのであって、つまり、どの労働現場でも生産性の向上は求められるってわけなのだ。雇用されたる労働者はタイムレコーダーをぼんと押せば、あとは終業時間まででれておればいいというわけにはいかなのであるからして、きみも顔を洗ったら、さっさと食べなさい」

叔父さんは朝食を並べてくれる。これをみると、叔父さんには土曜日も月曜日もみな同じ一日だということがよくわかる。叔父さんの家に来てこれで十回目の朝だけど、朝ごはんはいつも目玉焼き、それに味噌汁とトマト。三つの色で完全に統一されている。

居候だから文句はいえない。それにここにきてみてわかったけれど、叔父



さんは貧乏なんだ。ぼくを置いておくのは大変なことになりかねない。

「きみは毎日よく寝ているのかな」

叔父さんはぼくの顔をみる。

「うん。寝ているよ」

答えはしたけど、実はよく眠れないことのほうが多い。昨日だって、なかなか眠れなくて、やつととろとろしたと思ったら、「太郎、起きろ！」と叫ばれてしまった。「よく寝ているか」と聞くくらいなら、土曜日くらいはそっと寝かせてくれたらよかったのに。

「ふむ」

叔父さんはフライパンを洗い始める。

叔父さんは、ぼくがおきるよりもずっと早くから仕事をしている。作家とということになっているらしいけれど、どんなものを書いているのかは知らない。

「ちょうど飯どきによい話題を思い出した。それでわざわざいうのだけれど、

叔父さんが小学校一年のときだ。学校でウンコをもらった。わしだって学校にはいって間もない幼い日々というのがあったものだ。わしは学校のトイレがこわかった。もっともそのころはトイレなどとはだれもいっていなかったな。便所だ。学校の便所というのは、今とはまるでちがって、とても汚かった。臭かった。セメントの壁に向かっておしっこをする。壁の下には溝がある。休み時間はみんながいつせいに便所に行くから、こどもが一列に並んでじゃあじゃあやると、溝は小便でいっぱいになって、それがあわ立って流れて行く。つまり、あわ立つ小便の急流におのれの小便をませこむわけだ」

叔父さんの話は始まったら止めることができない。

幸い、ぼくはここでご飯を食べ終わって、ウンコが出てくるのに備える。

「小便の大河が流れ下る溝には、ウジがよくわく。ウジというのはハエの子どもだ。子どもがいるくらいだから、ハエもたくさんいて、ブンブン飛び回る。ハエそのものはふだんから見慣れていたからどうということもないのだが、こわいのは蠅取り紙だ。知っているか。天井から、ねちよねちよっとし

たテープが垂らしてある。そこに飛んでいるハエがくつつくという仕掛けだ。とにかくハエはいっぱいいる。便所のあちこちに何本もつるされた蠅取り紙にハエがくつつき、もとの紙がまったくみえなくなるまでに真っ黒にふくれあがる。それが不気味でこわかった。だから、便所に行くのがいやで、なるべくがまんして、できるだけ行かないようにしていた。そして、行ったときは、早く逃げたいものだから、うんと力を入れて急いで小便をするのだ。さあ、茶だ」

叔父さんは大きな急須を置く。そして梅干を出す。

叔父さんはテーブルの前にすわる。叔父さんは朝ごはんはとつくにすませているけれど、ぼくに合わせてこの時間にお茶をすすりながら大きな梅干を食べる。ぼくがくる前は どうしていたのか知らないが、いまは毎日こうしている。

「それでだ、ある日のことだ、この日はどういう力の入れまちが良かったのか、小便をするつもりだったんだが、うんと力を入れたら、ウンコも出てし

まった」

「立ったままで？」

「むろんだな。とにかく便所はこわいものだ。大をする場所となるともっともとおそろしいから、とてもなかにはいる勇氣などない。それで、ウンコを出したことはとりあえずそのままにして、何食わぬ顔をして教室にもどったのだ。だがな、いくら涼しい顔をしていても、ごまかせないものがある。まわりの連中が、くさい、くさい、というものだから、ウンコもらしがすぐにばれてしまった。このことは、絶対に忘れることのできない記憶として残った。何かの加減でこのことをふっと思い出してしまうと、一人で顔をあかくしなければならぬ。あやあや、とかいって、手でこのあたりを振り払わないと、その記憶が頭にべたつとへばりついたままではいる。電車のなかでの記憶がもどってきたりすると、実に困ったもので、何度も何度も忘れたいと思うのだが、忘れようと思う前には、まず思い出しているわけだから、そのたびに記憶が新たになって、よけい思い出しやすくなる。というわけだ

な、素人了見でも十分にわかるように、寝よう寝ようとすると、やっぱり絶対に寝られない。寝ようとしていることを忘れると寝られる。きみもそのくらしいのことはわかっているだろう。つまり、どうにも寝られない原因というのはだ、寝るにはどうしたらいいのかを知ってしまったことだ。それがいまところの暫定的な結論だ」

おじさんは、梅干の種をはきだしてお茶をすする。

「思い出すと、あのときにこうすればよかったと思うことって、いっぱいあるよね」

「そうそう。力の加減さえまちがえなければ、ウンコもらしは防げ、一生の痛恨事は避けられたであろう。すべてそういうものだ。人間の知恵がなすこととは、みな、あのときにこうすればよかったと思うことばかりだ。こうすればよかったということはできなくて、こうしてはいけなかったということをしてしまう。だったら、何もしなければいいというのだろうが、それはその通りだが、そんなわけにはいかない。こっちは生きているのだからな」

叔父さんは、お茶をまた飲む。この段階にまでくると、叔父さんの朝の話は終わりに近づく。

ぼくは食器を片付けようと立ち上がりかける。

「そうだ、思い出した。さっきの曜日の話だが、中国ではこんなことがあった。昔、混沌くんというのがいた。コントンくんだ。南にシユクというオッサンがいて、北にコツというオッサンがいた。いや、オッサンではないかもしれない。オバサンかもしれない。まあ、ろくでもない余計なことをするのは、どちらかというオッサンのほうだろう。二人のまんなかいたのがコントンくんだ。二人のオッサンがコントンくんの家に行くと、えらい親切にしてくれた。シユクはよくいる文句垂れのオッサンで、だれも相手にしてくれないからテレビに向かってぶつぶつまらんことを並べるようなやつなのだが、そのシユクのたわごとを親身になって聞いてやったし、コツはコツでやはりよくいる一つのことにごだわるオッサンで、だれも相手にしてくれないからちまちま妙なコレクションに凝るようなやつなのだが、そのコツのこ

だわりをさも興味深そうに聞いてやったりした。それで、二人のオッサンはいい気分になり、聞いてもらうだけでは悪いと、何かお礼をしようと思ったのだ」

ぼくは中途半端な姿勢で、叔父さんの話を仕方なく聞き続ける。

「きみもよく知るように、オッサンというのはいろくでもないことしか考えない。シユクとコツはオッサンであるから、ものを見る目、ものを聞く耳、ものを食う口、息をする鼻と、顔には七つの穴があいておって、これにはなはだ便利であると思っていた。ところが、コントンくんはのぺっとしていてひとつも穴がない。こいつはかわいいそうだってんで、親切のお礼にと、一日にひとつ穴をあけてやることにした。まことにけっこうな仕事をし、七日目にみんなごと七つの穴があいたら、ああら不思議、コントンくんは死んでしまった。これはよくわかる話だろう。一日ごとに立派な仕事を日々積み重ねていくと、結果として、ろくでもないことになるという教訓だ。同じ七日でも、中国ではコントンくんを殺し、西洋では天地を創造して一日の

休みのオマケまであったわけだ。しかし、ここで、よく考えてみないといけない。これは同じなのだ。コントンくんは穴をあけるのも天地を創造するのも、この世に何か秩序らしきものをつくろうとしたわけだ。その結果、このろくでもない世界が生じた。コントンくんは死んでしまったからまだいいよなもの、われわれのほうは、こうしてろくでもない世界で生き続けたいとならない。どっちがましだかわからない」

「死んだほうがいいってどういうこと？」  
ぼくはきちんとすわり直す。

「ほう、わしがそういったように聞こえたか。生きているのがいいのか、死んだほうがいいのか、今日のところの暫定的な結論としては、ひとつは、死んだほうがいいか悪いか考えることができるだけ、生きているほうがましだというのがある。でも、これは素人見でもすぐに気がつくように、死んだほうがいいか悪いか考えなくてすむだけ、死んでいるほうがましだということもあるわけだ」



「ぼくは、まだどっちがいいかわかるほど生きていない気がするな」

叔父さんは、大きく目をあけて、ぼくをみる。

「ふむ。その通りだな。毎日毎日ろくでもないことの繰り返しのうちにも、人間はただ繰り返し返しているだけではないらしい。突然、昨日と今日とでは大いにちがうということもある。シユクとコツの馬鹿さかげんはここにある。七つ穴をあげようというので、七日間やりとおしてしまったところがいいものだ。おそくとも四日目とか五日目とかに、このままやり通していいものかどうか気づきそうなものだけだな。国の政治というものは、シユクとコツの馬鹿さかげんを踏襲しておつて、始めたら途中でやめることがない。昨日と今日、今日と明日が、同じように続くこともあれば、そこに厳然たる断絶があることもあるのだ」

「そうだよね、コントンくんのように突然死んでしまうこともあるよね。ぼくはね、ぼくが急に死んでしまったら、だれか悲しむ人がいるのだろうかって考えることがあるんだ」

「ふむ」

叔父さんは、テーブルにひじをつけて、その上にあごをのせてぼくの顔をじっとみつめる。ぼくは視線をさけるように天井に顔を向ける。

「あのね、昨日、学校のクラスの子のお姉さんが亡くなったらしいんだ。それを聞いたクラスの子がとてもショックを受けていたよ」

「ふむ。クラスの子のお姉さんか。じゃあ、若いんだらうなあ」

「ぼくのぜんぜん知らない人だけどき。ぼくが死んでしまっても、ショックを受ける友だちなんていないだらうな」

「ふむ。だれも悲しまないのでは、きみも死んだかいないというものだ。それでは残念だらうから、きみはもう少し生きていたほうがよさそうだな。きみがもう少し生きていくれば、このわしだってきみのために、少しは泣くようになるかもしれない。いっしょに暮らしていれば、いやでもそうなるだろう。今だと、無理すれば涙くらいは流すかもしれないが、たいして泣くことはできないだらう。もうひとつ付け加えておくと、きみの命はたぶ

ん残念がるだろう。もっと生かしておいてほしかった、もったいないことをしたってことになるだろうな」

叔父さんは立ち上がる。

「さて、わしは今日は畑に行くぞ。きみはどうするかな。ついてくるか」

「ううんと、家にいるよ。勉強しなくちゃならないから」

**勉強**しなくちゃといったのはまるっきりのウソではなかった。

一年生の間、とくに秋からはずっと学校に行っていなかったから、勉強をしておかないと困る状態ではある。英語の時間の質問は、たぶん先生は加減してくれたのだろう、とても簡単だったので、ぼくも答えられた。でも、加藤さんがだまっていた質問はぼくにもわからなかった。

とはいえ、勉強する気にはなれない。一年の教科書を見直すなんてできっこないもの。

まだ敷いてあった布団の上に仰向けに倒れる。

叔父さんの長話はうんざりするけれど、聞いている間だけは、少しは気がまぎれる。

一人になると、やっぱり同じ気分がずっと続いている。思うのはいつもと同じだ。

——どうしてぼくはここにいるのだろうか。このままここで死んでしまったらどうなるのだろうか。ぼくがどこにしようが、ぼくが消えてしまおうが、だれもなんにも関係がない。

「ちきしょう」

うつぶせになる。

「消えてなくなれ！」

ぜんぶなくなってしまうばいと思っても、なくなったりはしない。

息苦しさに、はねおきる。

外に出る。

半分こわれたような縁台にすわる。白い花が咲いている。ずっとマンシヨ

ンに住んでいたから庭があるのはめずらしい感じがする。

竹を編んだ垣根があつて、その前に植木鉢が並ぶ。垣根は一カ所壊れていて、そこを黒ネコが出入りする。

野良ネコなのか、飼いネコなのか、叔父さんは、いつもエサを少しだけ庭に出しておく。

そろそろネコのくる時間だろうかとみていると、黒いものがゆうつと出てくる。目がなかったら、何が出てきたのかわからないくらいに真つ黒だ。ぐうつとからだのがのびて、黒いばねがせいっぱいのびるようにして上半身が現れ、ぴよんと縮むように小さくなつて背中と後ろ足が出てくる。



だいたい、この穴は狭い。

子猫の時代はよかったが、おいらもこれだけからだが大きくなったのだから、きつくてしょうがない。ここが通れなくなつたら、おいらも太りすぎだな。

おやおや、少年がこっちをみている。最近、この家にいるようになったらしいが、なんかいやな感じだ。暗い顔だ。おいらの好みではない。

ほう、いつもの通り、ちゃんとある。この先生はいつも同じだ。煮干三本と、魚のフレークとごはんを丸めた団子が二つ。代わり映えしなくても、ぜいたくはいわない。いただくとしよう。

それにしても気持ち悪いなあ。少年がずっとこっちをみているよ。

おいらは、人にみられるのが好きではない。この黒さのおかげで人がきらう。黒ネコに会うと縁起が悪いとか、ガキどもがよくいう。そりゃあ、おいらに縁起を悪くする力があれば、そうしてあげるけどな。

さてと、食べてしまえば、ここに用はなしだ。ごちそうさま。

ミャーオ。

あいそのない少年だな。せっかくあいさつしているのに、返事もしない。ぼーっとしているぜ。ここの先生の息子かな。ちがうな、きつと。

おや、ちよいと暗くなってきた。あれあれ、いつのまにか黒い雲が広がっ

ているぜ。これは雨になるな。

雨がふってきたら、どこに行くかな。内田のおばさんのところにしようか。ちよつと、のぞいてみるか。

ああ、いるいる。せつせと花壇をつくっている。内田のおばさんは花好きだ。おばさんは親切なんだが、ちよつと面倒なところがある。メアリーちゃん、メアリーちゃんつて、おいらを抱きたがる。よしとくれといいたい。な、な、メアリーちゃんなんだ？ おいらはオスだつていうのに。

今日は、メアリーちゃんの気分ではないから、おばさんが家のなかにひっこんだ後でまたきて、物置の横にでもめぐりこむとするか。

それとも地下道に行つてみるか。上を列車が通ると、ゴーツと音がして、そのときの振動がなかなかよい。

ほんとうに降り出しそうだ。よし、地下道に急ごう。

おや、アパートの裏に、いやなものがあるようだ。ミャーミャー泣いてるぜ。ああ、いやだ、いやだ。あんまり泣くと死んでしまうぞ。

また捨てネコだ。泣くとからだが衰弱する。おいらの兄弟たちはみんなそうだった。小さな箱に入れられて、みんなミヤミヤ泣いて、みんな死んでしまった。おいらだけは、泣くのをやめてだまってじっとしていた。ふたをあけてくれたのが内田のおばさんだった。「かわいそう！ みんな死んでる！」おばさんはそう叫んだ。でも、おいらは生きていた。かすかにミヤミヤと鳴いてみせた。おばさんは命の恩人つてやつだ。

ああ、ミヤミヤ泣いているぜ。おいらにはどうしようもない。ああ、いやだ、いやだ。おいらは忘れないぜ。箱のなかでみんながミヤミヤ泣いていたのを。そのみんなが死んでしまったのを。おいらは運よく生き延びたけど、箱のなかにいたあのときのことを忘れはしない。

「忘れはしないって、覚えているということかな」

「ほう、だれだい、おいらに話かけてくるのは。なんだ、真つ黒なカラスじやないか」

「黒いのはきみと同じさ」



「箱のなかのネコが死んだらつつこうと待っているのか」

「あいにくと、今朝はもう腹がふくれているので、そんな気はないさ」

「どうだか」

「忘れはしないとったのは、ずっと覚えてるっていうことかい」

「カーカー、うるさいなあ。おいらが捨てられたのは三年前。そのことはずっと覚えてる。忘れるはずがない」

「じゃあ、聞くけど、思い出すのはいつだい？」

「しよっちゅうだ。だから、おいらは、いくら親切にされても、人間は、ほんとうのところ信用しない」

「それはいいが、思い出すと、昔の記憶がもどってくるのだろう」

「そうだな。ありありとな。死んでしまった兄弟たちのぬくもりだって思い出す。そのおかげでいらは生き延びたんだからな」

「じゃあ、聞くけど、思い出すとそこに記憶があるわけだ」

「そういうことだ」

「記憶はもともとのあるのかい」

「あるから思い出す」

「記憶がもともとのあるというのはどうやって確かめるんだい」

「簡単だ。すぐに思い出せるからな。思い出すとそこにある。あたりまえのことだ」

「思い出さなかったら、そこにあるのかどうかわからないんじゃないのかなあ」

「思い出さなくたってそこにあるものはある」

「それはどうやって確かめるのかい」

「何をごちやごちやカーカーいつているのか。すぐに思い出せるんだから、記憶はそこにある」

「それはちがうな。思い出すから記憶がもともとのあったと思うだけで、実際には、思い出したときに記憶はできるのさ」

「何のことやら。とんちきなカラスだ」

「おれのいうことをよく聞きな。きみが思い出す。そのときに記憶ができる。

昔、きみが捨てられていたという記憶が、そのときにつくられるのさ。それをきみは思い出しているわけだ」

「昨日も思い出した、いつも同じ記憶だ。ずっと覚えている」

「昨日思い出したというそのことだって、いま思い出したときにできた記憶さ。ぜんぶ、記憶は思い出すときに生まれるものなんだからね」

「ふん、ばかなことを」

「そうかな。おれのいつていることのどこかまちがっているかな。きみがいま思い出すことと、明日思い出すことが同じとは限らない。だって、思い出すときに記憶が生まれるのだから。明日になれば、きみは別の生い立ちを思い出すさ」

「それはおかしいじゃないか」

「ちつとも。明日思い出すときに別の生い立ちをきみは思い出すけれども、その生い立ちを、きみは、昨日も思い出したと、明日は思うのさ。今、きみ

が、昨日も同じことを思い出したといったのと同じに、明日もそう思うだろうさ」

「何をいいたいんだ。ごちゃごちゃほざいて」

「別に。いまいったことをいいただけさ」

「ふん」

「おこったかい？」

「おこりはしない。でも、おいらにはわかっている。そうやってからんでくるのは、カラスくんよ、おいら以上にいやな記憶をもっているからなんだろ」

「いやな記憶ではない。いい記憶。よすぎる記憶さ」

「ふん。負け惜しみだな。ほんとうは悲しいくせに」

「なぜ悲しいという感情があるのか。そんなものなければいいのにつて思わないかい」

「いちいち悲しんでいたのではおっつかない。おいらは悲しまないことにし

ている」

「それはいいことだよ。昔の記憶があるから悲しいんで、それが全部ないものだったら悲しむことだってない」

「それでか。悲しさを消そうとして、せいっぱい屁理屈をこねたというわけだ。ご苦労なことだ」

「屁理屈であつても、どうせおれたちが生きているのはいましかないってこと。でも、それが結局、いちばん悲しいのかもしれない」

「もうつまらんことをごちやごちやと。ああ、とうとう、雨が降ってきたじやないか。地下道まではもつと思つたのに。妙な話にまきこまれたもんだ」

「そいつはすまなかつた」

「いやだ、いやだ。なんとという朝だ。カラスのあほうめ。あつちへ行け！」

縁台の上でいつの間にかぼくはねむってしまった。夜よく寝ていなかったからだろう。

——冷たい。

雨が顔に降り注ぐ。驚いて起き上がる。

その瞬間に、目に入ってきたものがある。塀の向こうに人がいる。にっと笑う。

——あつ、昨日の子だ。

そう思うと、少年の姿が消えている。

急いで外に飛び出す。雨がざあつと降っている。細い道の向こうに少年の黒い姿がある。また、にっと笑って手招きをする。

ぼくが走ると、少年の姿は消える。

広い道に出る。左右をみて、少年はいない。

——どこに行ったのだろうか？

灰色の空からは雨が落ちてくるだけ。

道を渡ってあちこちさがすと、向かいのアパートの奥の線路のそばに少年がいる。また手招きをして、にっと笑う。

雨が一段と激しくなる。その中を走って近寄ると、こんどは消えないで、少年はいう。

「約束してくれ」

「？」

「明日、午後一時までに、西念寺にきてくれ」

——西念寺？

島崎くんの寺だ。

「どうして？」

「そのときおれも行くから、おれがほかの連中にみえるかどうかみるがいい」

「どういうこと？」

「きみとは話ができそうな気がする。きみは洞穴で『消えてなくなれ！』といった。Once upon a time おれが人間だったのは、ランドセルをしょっていたとき。おれもそういったのだ」

「だれなの、きみは？」

「だからカラスだよ」

「ちがうよ」

少年はくるつと向こうむきになると、姿が消える。

アパートの上で、「カー」とカラスの音がする。

そして、ミヤミヤとかな声が聞こえる。

**叔父**さんがびしょぬれになって帰ってきたとき、ぼくは、玄関で、黒ネコの赤ちゃんにミルクをやるうとしていた。

「だめだね、皿に牛乳をたらしたって、ネコの赤ん坊には飲めやしないな」

「どうしたらいい？ コップで飲ませるの？」

「スポイトがいいだろうな」

「スポイト？ そんなものあるの？」

「この家にあるのかって？ 人間の胃袋がここに二つあって、スポイトが一つもないということはありえない。スポイトは胃袋よりすぐれている。吸い



込むのにも、吐き出すのにも使える。人間の胃袋は、情けないことに、ふつうは吸い込むことにしか使えない。口からぴゅうつと吸い込んで、みんな腹のなかにおさめてしまう。食べ物だって、飲み物だって、悪いたくらみだつて、金だつて、みんな、ぴゅうつと吸い込む。人間の胃袋はそのためにできている。たまには吐き出すことがあつてもだ、吐き出されたものはなんの役にも立たない」

叔父さんはスポイトを出してくる。

ネコは叔父さんに抱かれてミルクを吸う。

「ほら、うまくいくだろう。きみの胃袋にはこういう芸当はできない。それにしてもこいつは小さいなあ。まだ生まれたばかりだろう」

「捨てられていたんだ。このダンボールのなかに入れられてね」

「ふむ。きれいな毛布だな。仕方なく捨てたんだらうかな」

「仕方なくでも捨てられちゃったことにはかわりないよ。かわいそうだよ」

「かわいそうかな？」

「かわいそうじゃないの？」

「かわいそうかどうかは、いまはわからないだろう、これから生きてみなくては。生きてみて、捨てられて死んでいたほうがよかったということになるのかもしれない」

「それなら逆だつてあるんじゃないの。それこそ生きてみなければわからないよ。さっきのコントンくんは死んでどうなっちゃったの？ 死んでよかったの？」

「コントンくんが死んだのでこの世に混沌はなくなったわけだ。秩序だけの世界になったということだな」

「そうではなくて、死んだコントンくんがどうなったのかつて」

「死んだら何もないだろう。死んで何かあるとしたら、あの世のコントンになるってことだろう。あの世でもコントンがあるのなら、コントンくんは死んではないってことにならないかい。だから、死んだといったからには何もなくなったのだろう」

「だったらやっぱ生きていなくちゃ。かわいそうなんだよ、捨てられたのは。捨てられて死んでいたほうがよかったなどということは絶対にないよ」

「そうかな。言っている意味がわからんが」

ぼくは妙に興奮して、

「叔父さんの話ほどじゃないよ。だから、ぼくがちがうようにしてみせるよ。この子が生きていてよかったと思えるように、ぼくがしてみせるよ」

「そいつはすごいな。飼ってやるのかな」

「ううん、それはわからないけど」

ぼくは急にためらう。

——ぼくみたいなのが飼っていいのか。自分のことさえあやしいのに。

子ネコはたっぷりとミルクをのむと、寝入ってしまう。

「わしはシャワーを浴びてくる。こんなに降るとは思っていなかった。出てきたら、昼飯をつくるからな。いいトマトをもらってきたんだ。それでスパゲッティーをつくらう」

「スパゲッティーならぼくつくれるよ」

「へえ、きみに料理ができるのか」

「まあね」

**叔**父さんはいっている間に仕度を始める。

真つ赤なとれたてのトマト。玉ねぎとニンニクはある。ピーマンも入れようか。それとツナ缶がある。

スパゲッティーは二人前。いや三人前にしちゃおうか。たつぷり叔父さんに食べてもらおう。

東京のマンションでこっそりつくっていた。あの学校は給食だったから、学校に行かないと昼の食事に取りつけない。おこづかいがある間は外で買って食べたが、貯金が底をつくとき、家にあるものを適当にごまかして食べた。スパゲッティーは買い置きがたくさんあった。

まず玉ねぎを刻む。マンションで一人で玉ねぎを刻むときは、せいぜい半

分とか四分の一だったけど、今日は一個丸ごとだ。トントントンと細かくしていくと、ツーンと目にしみる。

あのころは、ずるずると一人で食べた。おいしいと思ったことはない。皿を洗って、使い残しの玉ねぎはラップをして自分の部屋に隠し、ゴミは外にまで捨てて行った。

トントントン。目にしみて、涙が止まらなくなる。

タオルを洗面所にとりに行く。風呂場でシャワーをあびる音がする。じゃあじゃあ流れる水の音のなかに、叔父さんの声がまじる。聞いたことのある歌だ。

親父がよく歌っていた。昔のアニメの主題歌らしい。叔父さんとみていたのだらう。兄弟だもの。

また涙が出てくる。

洗面所の水をじゃあじゃあ出して顔をびしょびしょにぬらす。

日曜日、十二時四十五分に西念寺に着いた。

門の脇の小さな八百屋さんの前あたりからぱらぱらと人がいる。ぼくはいちばん外側にそつと立つ。

門に「伊藤家告別式」の立て札がある。境内に大勢の人がいる。中学生らしい一団があつて、そこだけ場違いのようににぎやかだ。みたような顔の子もいる。

ざつとお寺の内と外を見回して、黒い少年はいないようだ。

「お店あぶないらしいわね」

「こんな田舎に、高級フランス料理なんて無理だよな」

ひそひそと話している声が聞こえてくる。

「ちがうのよ。お客さんは結構いたのよ。去年まではね」

「でも、ランチでも二千五百円だろ」

「値段じゃないの。とつてもおいしいの。でもね、今年になつて味がたんと落ちたのよ。若いコックに任せつきりだね、だって、おねえちゃんの病氣

「でしよう、お店どころでなくなっちゃったのよね」

「おれも大変だよな。会社はリストラの嵐でさ。雰囲気悪くて、もう辞めちやいたくなるよ」

「だめよ。麻衣はまだ中学二年なんですからね。辞めるなんてぜったいにだめ！」

霊柩車がバックしてきて門の前にとまる。境内がざわつき始める。

本堂からお坊さんが出てくる。よくみると島崎くんだ。その後ろに、男たちを支えられて棺が現れる。

急にしいんと静まりかえる。

棺の後ろに、写真を抱える制服姿の女の子がいる。伊藤さんなのだろう。その後ろにお父さん、お母さんらしい人、そしてもう一人、お坊さんがいる。島崎くんより大きい。お父さんだろう。

棺がぼくの前にくる。まわりの人に習って手を合わせる。

高くカラスの音が響く。

「縁起が悪いこと」

うわさ話をしていたおばさんがつぶやく。

西念寺の本堂の背後に小さな山がある。その松の枝に一羽のカラスがいて、もう一声高く鳴いて、飛び上がる。

山の向こうから、一羽、二羽、三羽とカラスが出てくる。

島崎くんは、ちらつと上をみるが、そのまま歩き続ける。

カラスは呼び合いながら数をどんどん増やし、上空はまたたくまにカラスでいっぱいになる。

「どういうこと。こわくない？」

おばさんがおびえたようにいう。

カー、カーとカラスの音が占拠する下を棺は運ばれ、霊柩車のなかへと納められる。ばたばたとカラスの羽ばたきが激しくなり、扉がぱたんと閉ざされる。次の瞬間にカラスの群れは消える。

島崎くんがちらりとぼくのほうをみる。眼がきらつと光る。でも、眼の焦



点はぼくに合っていないと感じる。

「本日は、お忙しいなか、娘、玲子のために……」

お父さんの挨拶が始まる。声がかすれ、何度か話が中断する。

「……治らぬ病とたたかって、もう一度、春を迎えさせたいとの願いだけはない……、ひとつだけ年齢を多くして、十九歳……」

お父さんは嗚咽を始める。

「お父さん。あまり泣き過ぎると、おねえちゃんが安心できないから」

ささやくその声が、ぼくにはつきりと聞こえる。まわりですすり泣きが始まる。

お父さんは、その後は何もいわず、深く頭を下げる。人々も頭を下げる。

長いお辞儀からお父さんがからだを上げると、人々が少し動きはじめ、伊藤さんたちが、ぼくのいるほうへと歩いてくる。どきんとぼくの心臓が鳴り、すぐに目を伏せる。

霊柩車の先に止まっている黒塗りの車に乗るために、伊藤さんはぼくのす

ぐ前を通る。伊藤さんが足を止めたので、思い切って目を上げる。伊藤さんはこちらをみていて、かすかにほほえみを浮かべる。ぼくは驚く。

振り返ると、黒い少年がいる。

**車**が出て、人々も散ってしまうと、たちまち境内は閑散とする。テントを片付ける葬儀社の人たちのほかには、門の脇にいるぼくと黒い少年と、そして島崎くんだけになる。

島崎くんは後片付けがほぼすんだのをみて、こちらにやってきて、

「なかにはいれよ。さあ、山本くんも、山田くんも」

少年が山田くんであると初めて知る。

「久しぶりだな」

島崎くんは山田くんという。

「ほんとうだ。四年ぶりだよ。話すのはな」

山田くんは、にっと笑う。

「なつかしいなあ」

「おまえは、でっかくなつたなあ。改めてみると、大きすぎるぜ」

山田くんは島崎くんのあごの高さしかない。それでも山田くんはぼくよりはちよつと大きいのだ。

「今日ほくるかもしれないと思つていたんだ」

「そうかい」

山田くんは大きくため息をつく。

「でも、知つていたんだらう。ぼくがこんなふうになつたことくらいは」

「そりゃあな。上からときどきみているから」

「カラスは便利だな」

島崎くんは大きな声で笑う。島崎くんはよく笑う。

ぼくはどうしていいかわからずに少し離れて立つている。

それに気づいて、島崎くんは、

「それで、山田くんはさ、山本くんのことを知っているのかい」

「ここにきてくれてくれておれが約束したんだ」

「それって、ほんと？ ぼくは山本くんとはおととい初めて話をしただけなんだけどさ。山田くんはそんな約束をするくらいもうよく知っているんだ」

「おれもおととい、初めて会っただけだけだな」

「そうなんだ。どこで？」

「谷津観音で」

「谷津観音。あの洞穴か。へえ、あそこは昔からのお気に入りだからな」

「よくいつしよに行ったよな」

「真つ暗な洞穴のなかでさ、手をつないで寝ていたな。夏休みに寝ころぶと、石が最初はひやっと冷たいんだ。気持ちよかったなあ。冬は冬で、最初は寒いけど、不思議とだんだん暖かくなってくる」

「おれはいまもそうしているさ」

「ああ、いいなあ」

ぼくは、二人が話すのを脇でみている。

山田くんはちらっとぼくをみる。

「山本くんっていうのか。山本くんが島崎くんとも友だちだったとは知らなかった」

友だち？　ぼくは友だちなのだろうか。

「そうさ。ぼくらは友だちさ」

島崎くんは山田くんに答える。

**初**七日の法要の準備をこれからするという島崎くんにしたがつてぼくらは本堂にあがる。

「うちの寺にはさ、こんな言い伝えがあるんだ」

「どうせ、得意の幽霊の話だろう」

と、山田くん。

「そのとおり」

「人間の世の中って死んでからもいろいろあるよな。カラスにはそんな面倒はないさ。死んだらおしまい。あっさりしたものだよ」

「うちの寺ではさ、よくあるんだよ、亡くなった人があつてさ、茶毘にふす間に、その亡くなった人がここにもどつてくるってことがね」

——ダビってなんだ？

島崎くんは座布団を並べ始める。何となくこわい感じがして、島崎くんのそばにいて手伝う。山田くんは床にすわってぼくらを見ている。

「つまりさ、火葬場で焼いている間に、死んだ人がこの本堂にもどつてきてさ、あの阿弥陀さまと話をするんだよね」

島崎くんは仏像を指し示す。

「へえ、そうなんだ」

山田くんは仏像を見上げる。

「それはこういうことらしいんだ。死ぬときまでに自分の思いをちゃんといつておけなかった人がさ、これが最後だというので、ここにきて話をするん

だよ。ちょうど火葬が始まるころに、こうして本堂にいるとき、だれもないはずの本堂の、入り口のあのあたりに、ふっと何か気配がするんだ。すうっと冷気が襲って、ぞくぞくつとすると、ほら、ここを死者が通つて中はいって行くんだよ」

島崎くんはそういういながら、座布団を両手に持ったままその場所を歩く。「それでさ、床がみしみしいって、ふっと気がつくくと、阿弥陀さまの、ほら、あのあたりで話し声がするんだよ」

ぼくは島崎くんから離れないようにする。

山田くんは、

「死人が話すのを聞いたことがあるのかい」

「愚僧がか？ 愚僧は、まだないけど、うちの親父さんはさ、何度も経験しているらしい。だからさ、今日は、ぼくは火葬場に行かずにここに残ることにしたんだ」

「そうなのか」

島崎くんは仕事を終え、山田くんのとなりにどつかと腰をおろす。ぼくもそのそばにすわる。

「ひよっとしてお姉さんがやってくるかもしれないと思っっているのかい？」

「もしも声をもう一度、聞けるんだったらね。でもさ、お姉さんはさ、家族の人たちとたっぷり話をしていたから、ここにはもどってはこないだろうな」

「おれもそう思うな」

「それでも、ここにいようと思っただけ」

二人はそのままだまっってしまう。

しばらくして、島崎くんが、

「うちの死んだ爺さんがさ、少年時代にこんなことがあったと、聞かせてくれた話があるんだけど、聞かないか」

「ああ」

「むかし、漁師の家の三男で、三郎という人がいたんだ。三郎は兵隊にとら



れて戦争に行ったんだって。ある夏のひどい雨の日に三郎は家に帰ってきた。生きてではなくて、白い箱のなかの白木の位牌となっていた。骨も遺品も何もなかった。親はびっくりしたけど、もうどうにもならない。その夜、この本堂に人々が集まって、位牌を前に置いて念仏をあげた。雨が降り続いていやな夜だったそうだ」

島崎くんは話をするのがじょうずで、だんだん寒いような感じになつてきて、ぼくはからだを小さく縮めて聞き入る。

「そのころの本堂はいまより小さかったんだ。ろうそくの明かりしかないから、小さくても光がゆきとどかなくてとても暗かったらしい。外は激しい風と雨だ。なかはむんむんと暑かった。爺さんの親父さんと爺さんがお経をあげた。お経の区切りのいいところで、焼香がはじまった。三郎のお父さんが最初にお香をくべた。香の煙が細くのぼると、きしるような音がかすかにした。爺さんは、それを耳にすると、お経を唱えるのをやめた。爺さんの親父さんもそうした。三郎のお父さんも香の煙のあがる先を見上げた。みなが耳

を澄ませた。きしるような音は、香の煙の中から聞こえてくるようだった。外では風雨がますます激しくなっているのに、本堂のなかでは、そのかすかな音だけがはっきりと聞こえたんだ」

ぼくは島崎くんにしりよる。

「しゅうしゅう、ひゅうひゅう、そんな音だった。人々がじつとそれを聞いていると、だんだんとそれがはっきりしてきて、人の泣き声になった。『三郎だ！』お母さんが叫んだ。お父さんは『ああ、三郎だな』。泣き声は大きくなって、長く長く続き、そして途切れがちになって、ふうつという大きな吐息とともに止んだ。それで、爺さんたちがもう一度お経をあげようかとしたときに、話し声が始まったんだ」

ぼくはもうびったりと島崎くんからだを寄せている。

「三郎はこういった。『おれにはひとつだけ望みがある。たった、ひとつだ。だけど、それも叶えられずに、この南の島で死んでしまう。この島のまわりにも海がある。おれが望むのはこの海ではない。この海ではないんだ。ふる

さとの海だ。おれの生まれた村の海だ。あの浜から、もう一度、舟を漕ぎ出したい。朝風の海へだ！ さあ、浜辺に漁師が集まる。おれはだれにも負けない。星が消え、東がほんのりと赤くなるとき、おれは舟を押し出す。腰に力を込めて押すと、舟は波の上へとすべる。ひらりと、舟に飛び乗る。えいっ、竿をふんばると、舟は波をわける。えいっ、えいっ。櫓にかえる。沖へ向かつて、まっすぐだ。風がおれの髪をわける。村のどんなやつにも負けやしない。おれが先頭だ。今日はどこに魚がいるのか、おれは知っている。ぐいぐいと漕ぐと、みんなは付いてくる。はははは。みんな遅れているぞ！ みるがいい。日の出た。光が海面を走るぞ！ 今日は大漁だ。親父も、おふくろもおおよろびだ。三郎の笑い声が泣き声に変わった。聞いていたみんなも泣いた」

島崎くんはここで息をつく。

「しばらくして皆の嗚咽がおさまると、本堂に澄んだ声があった。『三郎よ、私を乗せて、舟を出しなさい。』おまえさまをですか？』『そこに舟がある。』

風が本堂を通り抜けた。潮の香りがした。ざつと波の音だ。『へい。じゃあ、お乗りください。押しますから。』三郎よ、今晩は、いい月だな。『ほんとうでございませぬ。沖まで、昼間のようによくみえますねえ。本堂に青白い光がさしこんだ。』さあ、行きますよ！ えいっ、えいっ。それ。なぎさを踏みしめる三郎の足音がして、静かに舟がすべり出て行つた。波の音が本堂に広がつた。『さあ、あつしも乗りますから、ちよつと揺れますよ。気をつけてください。』とん、と三郎が舟に乗り、『漕ぎますよ。』ギーンと櫓のきしる音がした。舟が波をわけた。『阿弥陀さま。どこへ行きましようかね。』ああ、いいよ、おまえの好きなところへ漕いでくれれば。『へい。三郎は大きく高い声で、大漁節を歌いはじめた』

島崎くんは朗々と歌い出す。

「海はいいな」

山田くんがいう。

「ああ、海はいいわ」

「おれたちカラスも、みんな海が好きだ。とくに、明け方だ。夜の暗さというのは、空の上のほうから、すうつとすべり落ちて消えて行くんだ。空のてっぺんに朝の最初のしるしがくると、おれたちは目を覚ます。山の上のねぐらで目をあけると、カアと、まずかるくひと声鳴いてみる。のどの奥のほうで、ちよつと音を出すだけだ。カアってな感じでね。それは、おれはおきたよ、まわりもおきているかい、っていうところなんだ。そうすると、カアと、やっぱりかるく声が返ってくる。あちこちで、そんなやりとりがあつて、だいたいみんながおきたことがわかると、身をふるわせて、ちよつと翼を動かしてみる。大事な翼に、おはようつて、あいさつするんだよ。よし、今日も自在に動くぞというので、さああつと羽ばたくと、からだか枝を離れる。胸に風を受けて、すうつと、山の斜面をなめるように下る。それから、さつと、上に向かうんだ。そのときに、海がみえる。明るくなりはじめた、深く青い色の海が、ずうつと広がっている。ああ、海はいいな」

ぼくは山田くんの話に引き込まれ、

「山田くんは、ほんとうのカラスみたいだね」

思ったままにいう。

「Once upon a time おれが人間だったのは、ランドセルをしょっていたとき。いまはカラス。いや、半分また人間にもどってこようかと思つてるところかな。でも、人間というのは困つたものだ。頭で考えるから」

「頭で？ 考えるのは頭に決まっているだろう」

と、島崎くん。

「ちがうな。ほら、今、話してくれた戦争なんかも頭で考えるからおこるんだ。それが証拠に戦争をするのは人間だけさ」

「そういうことかなあ？ カラスはどこで考えるんだい？ やっぱ頭だろう？」

「ちがう、ちがう。頭はそんな大事なことには使わない。カラスは翼で考えるのさ」

「ふうん。翼か。愚僧にはよくわからない。でもいいや、山田くんが半分で

も人間にもどってきたのなら、これからはいろんな話ができるわけだ」

「まだ人間にもどるとは決めていない。おれは四年の間が変わったけれど、人間界はあいかわらずだもの。ぼちぼち、気の向いたときにだけ人間にもどってみるってくらいかな。今のところは、島崎くんや山本くんのような友だちと話をするときだけだろう、せいぜいな」

——友だち？

またそういわれる。ぼくらは友だちなのだろうか。

「愚僧たち二人は友だちなものな」

——そうなの？

島崎くんのだっておととい帰り道で話ただけだ。それで友だちだなんて、どうしていえるのだろう。

「カラスや坊さんと友だちじゃ、うれしくないのかい」

山田くんがぼくにいう。

「えっ」

心で思っていたことが顔に出てしまったのだろうか。

「おれたちカラスどうしは、いちいち言葉でいわなくても通じ合うのさ」

山田くんはにっと笑う。丸い目がかわいい。やっぱり、ぼくと同じ中学生なんだ。なんだか安心する。

「それにさ、愚僧も山田くんも山本くんも、みんな太郎じゃないか。なっ！」  
島崎くんは目を大きくして、二人の顔を順に見る。島崎くんもその目は丸くてかわいい。

——ふうん、三人とも太郎か。

ちよつとうれしくなってくる。

「さて、愚僧ら三人こうして集まったところでさ、山田くん、山本くん、と呼び合うのは、なんだかな。ほかの呼び方を考えたいよな。名前はみんな太郎だし」

「どうでもいいけど、Once upon a time おれが人間だったのは、ランドセルをしょっていたとき。そのころは、よくカカシ、カカシと呼ばれていた。



それにはいい思い出がない。だからそれはやめてほしい」

「そうだったなあ」

二人はもともとの友だち。ぼくは島崎くんのこと、山田くんのこと、またまるで知らない。それでぼくも友だちなのだろうか？

島崎くんは、山田くんのおでこをしげしげとみていう。

「やっぱりデコチンだ。変わらないなあ。だからカラスになっても、デコチンのハシブトガラスのほうなんだろう」

「おれは立派なくちばしのハシブトガラスさ」

「じゃあ、きみの名はハシブトのブトというはどうだい？」

「ブト？　なんか音に品がない」

山田くんがちよっと顔をしかめたので、ここで、ぼくはがんばって口をはさんでみる。

「濁りをとってフトっていうのはどう？」

「太いのフトか。フトってき、力がはいらなくていいにくいのかも」

と、島崎くん。

「じゃあ、ブットでは？」

「ブットか？ これならいいやすいか。山田くん、ブットでいいよな」

「まあ、二人がよければね。で、島崎くんは、やっぱりどうしたって和尚だろいなあ」

「芸がないけど、海坊主とかいわれるよりはましだろう」

「それじゃあ、山本くんはどうしようか。おれたちはまだ山本くんのことをよく知らないし。でも、島崎くんがきつといいのを考えてくれるだろう」

島崎くんはじつとぼくをみて、ぽんと手を打ち、

「よし、モボっていうのはどうだ」

山田くんがふきだし、

「和尚は古すぎるよ。いつの時代の人間なんだい。よくモボなんて思いつくよな」

「モボってなんのこと？」

山田くんは、

「あんまり古すぎて、おれは知らないな」

「えへん」

と、島崎くんは胸を張り、

「モダンボーイの略だよ。大正時代だったかな、昔のはやり言葉なんだぞ。愚僧は物知りである」

「大正時代？ それは古すぎるよ。それで、なんでぼくはモボなの？」  
「だってさ」

島崎くんは目を大きくして、

「山本くんはさ、いまどきの東京の少年って感じがしないからさ」

大声で笑う。

「なんで？ ぼくって大正時代なの？ ぼくだって都会的センスにあふれた中学生のつもりだけど」

山田くんは、

「まあ、モボじゃあ、なんかかわいそうかもな」

「そうかあ、ぴったりだと思っただけだな。じゃあ、ブットと同じ手で、モツボでは」

と、島崎くんはぼくをみつめる。

島崎くんがいろいろ考えてくれるのがうれしくなって、

「うん、それでいいよ。和尚がつけてくれるんなら」

「よし、これで決まりだ」

三人で手を合わせる。

「じゃあ、おれは行くよ」

「えっ、もう行くのか」

「おれは空からあがる煙を見送りたいんだ」

「わかった。ぼくは、やっぱ、ここにしよう」

二人はうなずきあう。それをみて、また少しさびしく感じる。

第三回 タンポポ

**遠**くのどろどろによんだ水の底から、こなくともいいものが近づいてくる。それはだんだんと大きくなって、耳のすぐ脇でうおんうおんとうなる。

目覚ましが鳴っている！

おきなくちや！

おきて、着替えて、トイレに行つて、朝ごはんを食べて、そして学校。そうだ、学校に行かなくては！

手をのばして目覚ましのスイッチを切る。あと五分ある。ぼくはいつも五分早く時間をセットしている。あと五分、やれやれ、と思つたときに、急に幸せな気分になる。

なんだ、今日は、土曜日ではないか。今週もずっと大変だった。学校に行かなければということとの戦いだつた。だけど、今日は土曜日だ。

そうだ。土曜日だ！

がばつとおきる。四時だ。今日はいつもより二時間以上も早くおきようと思っていたのだ。

パジャマのボタンをはずしながら、「太郎、おきろ！」という叔父さんの声を思う。ここのとてところあの大きな声を聞かずにすんでいる。

この家に来た次の日の朝に「太郎、おきろ！」は始まった。飛びおきたら、新聞をとつてきてくれと叔父さんにいわれた。外に出たら、門の向こうから「太郎さんでしょう。おはよう。となりの内田です。よろしくね」と、声をかけられた。ぼくは小声で「おはようございます」とこたえた。内田のおばさんだ。

東京のマンションではとなりの人がそんなふうに声をかけてくることはなかった。マンションの右どなりは夫婦そろって大学の先生とかで、いつもせかせかと足早に歩いていて、エレベータでいっしょになると、扉が閉まってから開くまでの間、腰のところ、人差し指と中指を交互に小刻みに動かし

ている。夫婦ともに同じクセだから笑っちゃう。左どなりは大きなおばさんで、午後に出かけて夜明け近くに帰ってくる。エレベータに乗り合わせてしまふとたいへんだ。ものすごい香水で窒息だ。おばさんは始終口のなかで何かしらぶつぶつ唱えている。きれいな服を着ていて化粧も派手だが、横顔はとても疲れたような感じだ。

あの朝、内田のおばさんは竹ぼうきを持っていた。おばさんは、小さな祠のある裏の林の掃除をよくしている。「今日が最初の朝ね」と、内田のおばさんはにっこり笑ってくれた。

**叔父**さんはもうおきて仕事をしている。

叔父さんの家には部屋が四つある。玄関の脇の広い部屋が叔父さんの仕事部屋だ。大きな机がひとつ、そしてたくさんの本箱。ぼくがきたために、その本に埋もれて叔父さんは寝起きをしている。その向かいの部屋をぼくにくれた。そのとなりがなんでもかんでも突っ込んである部屋で、ドアをいった

ん開けると閉めるのが大変だ。残りの一つが台所で、その小さなテーブルでぼくはいつも朝ごはんに目玉焼きを食べている。叔父さんのいる部屋と台所との間にはドアがあったらしいが、本箱を置くためにはずしてしまった。

台所に行くと、

「どうした、病気か、熱でもあるのか。こんなに早くにおきてきて。頭がおかしくなったんじゃないのか。だいじょうぶか。今日はたぶん土曜日だろう」

迷路のように置かれた本箱の奥に、叔父さんの背中がみえる。パソコンに向かつてしきりに何か書いているのだ。

「土曜日なので、ちよつと早起きしてみたんだ」

「ちゃんと寝たのか。人間は起きて働いている間に、頭のなかにだんだんと悪いものがたまる。そのままほっておくと一日の間にはかになってしまう。人間はもともとばかなところにもってきて、そんな厄介なくみがかからだにはある。それで、眠るのだ。眠ると悪いものが少しずつ溶けていくんだな。たっぷり眠れば、朝になるまでに、また元のいっばしの人間にもどっている



というわけだ。だから、寝ないとだめなんだ。このことからすぐにわかるように、遅くまでおきて勉強するのは頭を悪くする最も悪い方法だということだ。学校は、どうだ、ばかだらけだろう。みんな勉強ばかりしているからだ。どうしてこんな簡単なことがわからんのかな。眠れば眠るほどりこうになる。わしなんか、四六時中寝ていたから、学校ではいつも一番だったな。もちろん、成績の悪いほうからだろうって、素人了見ではそう思うだろうが、残念ながら良いほうからの一番だ。ウソだと思ふのなら三十年前のわしのうちに訪ねてきなさい。成績表をみせてやろうじゃないか」

叔父さんが背を向けたまましゃべり続けている間に、ぼくは冷蔵庫を開けて牛乳を飲み、

「海に行つてこようと思つて」

「ほう、海か。朝の海はいいぞ。もしかして、きみも素人了見で誤解しているといけないので、いっておくが、海というのはいつでもそこにあると思うのは大間違いだ。これはよくある驚くべき勘違いだ。すぐにわかるように、

朝がくるたびに、海は新たに誕生する。昨日の海は夜中にはなくなって、朝になると、今日の海が生まれる。それは海をみればわかる。昨日の海はそこにはない、あるのは今日の海だけだ。もしかしたら、素人のきみはまだわからないかもしれないが、だんだんと大人になるとわかるようになるだろう。いや、それは、ちがうな。大人になればなるほど、こういった正しいことはわからなくなるものだ。大人というのは思い込みの強い生き物だから、昨日の海と今日の海は同じものに決まっていると思っている。ちがうのは明らかなのに、その思い込みが眼を曇らせてしまうんだな。朝の海がいいのは、それが自然から生まれたばかりの海だからなんだ。生みたての海というわけだ」

先週聞いたブットの話の思い出して、朝の海がみたくなったのだ。

「日の出って何時くらいかなあ」

「日の出か、そうだなあ、あと一時間くらいあるだろう」

牛乳を飲んだコップを洗って玄関に行くと、ジョンがよく寝ている。拾ってきた子ネコだ。一週間でぼっちゃりとまるいからだになった。「まあ、かわ

いい。メアリーちゃんよりハンサムね。はい、ジョン、ハウドゥーユード  
ウー」と、内田のおばさんがいうので、ジョンという名で呼ぶことになった。

ジョンをおさないようにクツを取り出す。ふと思いついて、まだはいた  
ことのないスニーカーを出す。一年前の入学祝いに親父が買ってくれたもの  
だ。サイズが合わなかったのと、なんとなくはく気がしなくてそのままにな  
った。捨てずにもってきたのを、今朝ははいてもいいような気がした。

クツひもを通していると、

「日の出をみにくのか。まだ雲がかかっているかもしれないぞ」

叔父さんがすぐ後ろにきている。

「そうなの？」

ぼくは顔を上げずにひもと格闘している。

「うまくすればそろそろ晴れるかもしれないな」

「だったら、せつかく早起きしたんだから、行ってみるよ」

「そうか。それなら、途中で、これをポストにほうりこんできてくれ」

叔父さんは、ぼくの後ろにぼんと置いて、立ち去る。

足を入れるとちよいどいい大きさだ。

ひもをぎゅつと結んで振り向き、

「行ってきます」

叔父さんが置いた封筒を取り上げる。

「叔父さん、これは？ これを出すの？」

「頼んだよ」

「どういうこと？」

「きみがここにいるとだけ書いた」

「それだけ？」

「ああ、それだけだ。太郎はわが家にいる。光男。それで全部だ」

封筒は福岡にいる親父に宛てたものだ。

外は暗い。

まだ静まりかえっている町を自転車で走り、国道に出ると、さすがにそこは車が行き来している。

横断歩道の脇にポストがある。自転車のかごから封筒を取りあげる。

——このまま捨ててしまおうか。

でも、叔父さんが出てきてくれといった手紙だ。手をポストにさしのばすと、それまで赤だった信号が変わる。

封筒を胸のポケットにねじこむ。エイツと自転車をこいで国道を渡る。歩道に乗り上げると、

「山本くん、おはよう！」

と、大きな声。

——ぼく？

大きな犬に引きずられるようにして近づいてくる女の人がある。停車しているトラックのヘッドライトに照らされて顔がみえる。

「あつ、先生！」

教頭先生だ。

「山本くん、早起きなのね」

「おはようございます」

ぼくは軽く会釈し、そのまま自転車をこいで行こうとしたけど、先生と犬が歩道をふさいでしまっている。

「私って目がいいでしょう。薄暗くてもちゃんと山本くんだってわかったんだから。いつも散歩しているのよ。朝のうちに犬を散歩させないと、夕方はいつ帰れるかわからないし、いろいろ忙しいからね」

「はあ」

「これね、秋田犬よ。耳がぴんとしていて、どう、格好いいでしょう。耳が垂れている犬はかわいいことはかわいいけど、でも、このほうがしやきつとされていて、先生は好きなの。力が強いなのよ。だからたいへんなのよ。ほら、いまもぐいぐい引つ張って、行こう行こうってさいそくしているでしょう。それでね、ごめんね」

「はあ」

「この犬ね、日本の犬でしょう。だから日本らしい名前にしようと思ってね、タロウっていうのよ」

先生はくすりと笑う。

「じゃあね」

と、自転車の脇をすりぬけて行こうとする。ぼくは自転車を寄せて、小さく頭をさげる。

先生はくるっと振り返り、にっこり笑う。

「だから、いいでしょう。きっと、好きになるわよ」

「はあ」

「そうね、私のことかな。じゃあね」

**ト**ンネルの入り口に自転車を置く。バイパスの下をくぐる暗くて狭いトンネルだ。上から自動車の音がひっきりなしに響いてくる。向こうに小さくぼ

おっと出口がみえて、かすかに波の音が聞こえる。

こんなトンネルをやっぱり海に行くときにくぐったことがある。

あれは初めての海水浴だった。まだ保育園に行っていたころだったか。わくわくして電車を乗りついできたのに、狭くて暗いトンネルにはいったとたんに、急にこわくなった。ドーン、ドーンと大きな音が響いていて、すぐに帰りたくなった。それで、ぼくは、ぎゅつとにぎった。あれは親父の手だった。

今朝は一人だ。

トンネルを出ると、あたりは明るくなりはじめでいて、海のようにすがぼんやりとみえる。ザーツ、ザーツと、波の音が左右にひろがる。釣りをしている人がぼつりぼつりと立っている。

この町の中学校にきて最初に会ったのがさっきの教頭先生だ。叔父さんに連れられて、始業式の前の日に学校に行った。教頭先生は「山本太郎くん。すてきな名前ですね。好きになっちゃいそう」といった。変なことをいう先



生だと思ったけれど、たぶん、自分の犬と同じだからだったのだろう。そして「私の担当は体育。残念ながら、今年は山本くんのクラスの授業はありません。山本くんは、体育は好きでしょう」。ぼくは「それほどでも」と答えた。ほんとうはきらいだ。「そうなの？ いいのよ。走るのが遅いとか、鉄棒ができないとか、泳げないとか、そういう子はたいい体育がきらいなの。みんなの前で、できないことをさせられるでしょう。いやよね。わかるのよ、その気持ちはね。でも、ほんとうは、楽しいことなのよ、できない、遅い、下手、格好わるいことが、みんなにわかるっていうことはね」。叔父さんにはここにことうなずいていた。「というわけで、山本くんは、二年B組。好きになるわよ」と、教頭先生はぼくの肩をほんとたたいた。

あれから二週間、とにかく学校には行けてるけれども、学校やクラスを好きになるということは絶対にはありそうにない。

和尚とは友だちになった。だけど、月曜、火曜は休んでいた。水曜日に出たので休み時間にちよつとだけ話した。この前のときとはなんか感じが

ちがっていた。木曜日は和尚はずっとぼんやりしていて、ぼくだけでなく、だれとも口をきかずにいた。金曜日はまた休みだった。

というわけで、クラスの子と話をしたのは、今週は水曜日の休み時間の和尚と一回あっただけだった。

波打ち際に行くと、海の水はゆったりとゆったりきたりしている。

あの日の海は、ドーン、ドーンと大きな音がとどろき、砕ける波をみただけでぼくはすっかりおじけづいてしまった。「太郎、おいでよ」。姉に呼ばれた。はだしになったら、砂が熱くてびっくりした。「ここならこわくないよ」。砕けた波がすうっとあがってくるところの先端を姉は踏んでいた。「ほら、早くきなさい」。あの人はもつと波の近くにいた。

どこの海だったのか。その日のおいが胸のなかによみがえってくる。

——思い出なんて！

ぼくは、海に石を投げる。

あの日、親父は、水平に投げると石が水面でジャンプすると教えてくれた。

親父は二回、三回とジャンプさせたけれど、ぼくはぜんぜんできなかった。

今日もだめだ。ドボンと沈んでしまう。

波がこない境目に沿って歩く。

不意に釣り糸が顔の前をさえぎる。あわてて首をひっこめて下をくぐる。

釣り竿に気をつけなければと左右をみる。

もうかなり明るい。

波から少し離れた場所に、釣り人ではなくて、しゃがみこんでいる人がいる。

——何をしているのだろうか？

ちよつと変に思つてよくみると女の人だ。手を出したりひっこめたりしている。なんとなく近くのほうへと歩きながら様子をうかがう。

石を拾つて、砂をはらい、髪をかきあげて、その石を耳にあてる。首をかたむけ、しばらくじっとして、それからその石を砂の上にもどす。そして別の石を拾い上げ、また同じ動作をする。

その繰り返しがどんどん気になって、だんだんとその人に近づいて行く。もう三メートルくらいのところまで来て、その人が石を耳につけるために髪をあげたのをみて、ぼくの心臓がドキンと鳴る。

——きつと伊藤さんだ。

あの日に、和尚の寺で、ちらつとみただけだったけれど、伊藤さんにちがいない。

——逃げなきや。

ぼくは急いで離れる。

伊藤さんは今週も休んだままだった。

——何をしているのだろう？

聞いてみたいけれども、そんなことできない。

**あ**あたりはもうすっかり明るい。

日の出はみえなかった。西のほうでは雲が切れて青空がのぞきだしている

けれど、東のほうはまだ雲におおわれている。

これ以上歩いていても仕方ないと、浜から引き上げようとする、突然、くりくり坊主の大男が目の前に現れる。

——どこから出てきたの？

「やっぱ、モツボだ！」

頭から湯気をあげて和尚が走ってきた。

「遠くからみてモツボだなと思ったんだ。ふう。いやあ、暑い、暑いなあ」  
「暑いのか？」

「今日は暑いよ」

和尚は汗びしょびしょだ。

ぼくはちよっと肌寒いくらいに感じていた。

「和尚は、マラソンするの？」

「たまにね。今朝は急に浜辺を走りたくなってきた。ばーっと思いきり汗を出したくなかったんだ」

「そうなんだ」

「昨日も学校休んだだろう。なんかずっと変だったんだよ。夜なんかさ、よく眠れないし」

「そうなんだ。ぼくも、よく眠れないんだけど」。

「今朝はさ、本堂の掃除をしていたらさ、急にからだがむずむずしてきて、じつとしていられなくなっただ。そんなことってあるよな」

「はあ」

「この前、ブットがいつていたことも思い出したしさ」

「なんだっけ？」

「カラスは翼で考えるって。だったら人間はどうなのかって、走りながら考えたらさ。ほら、よくいうだろう、人間は考えるあしだって」

和尚は、自分の太ももをたたく。

「それって、草のアシじゃないの」

「そうだったっけかな。ああ、細かいことは、どっちでもいいや」

和尚は笑い、

「で、モツボは朝の散歩かい」

「ぼくもブツトのことを思い出して、日の出をみようと思ったんだ」

「日の出か。今朝はだめだね。もうとづくに過ぎちやつたよ」

「うん。ブツトもここにくるといいね」

「そういえばさ、今朝はぜんぜんカラスの声を聞かないなあ」

「ねえ、ブツトはほんとうにカラスなの？」

「そうだろうね。ブツトが自分でいうのだから」

「どうしてカラスになったの？」

和尚は大きな目をぐりぐりとまわしてぼくをみる。

「それはブツトに直接きいたほうがいいと思うな。ぼくたちは友だちなんだから」

———そうか、友だちなのか。

「そうだね」

ぼくはつぶやく。

「ブツトのやつ、今日はどこにいるのかなあ。どこで朝飯を食っているのかなあ。ぼくもそろそろ腹が減ってきたから、帰るとするかな」

和尚は行こうとする。

「あつ、ちよつと待って。ぼくね、ここに歩いてくる途中で、みたんだよ」と、いいかけて、胸がどきどきしてくる。

「何を？」

「伊藤さんを」

「伊藤さんって、うちのクラスの？」

「たぶんそうだと思うんだけど、浜辺にすわっていて、ちよつと変だったんだ」

「変？」

「石を拾って、耳にあてているんだよ。何度も同じことをしていたよ」  
和尚はふうっと大きく息を吐き、汗をぬぐう。



「石か？」

「うん、こうやってね」

ぼくは仕草で示す。

「そうか、石か。お姉さんだよ。伊藤さんのお姉さんが同じことをしていたんだ」

「そうなの？」

「去年の秋はさ、お姉さんもまだ散歩くらいはできたんだ。海が好きでさ、伊藤さんが腕を組んで、からだを支えて浜を歩いたりしていた。たまたまぼくが今日のように走っていたら、伊藤さんとお姉さんが浜でしゃがんでいたんだ。もしかして具合でも悪くなったのかと、急いで近寄ってみたら、モツボのいうようにさ、石を耳にあてていたんだ」

和尚はまた汗をぬぐう。

「お姉さんがぼくにいったんだ。『太郎さんもやってみなさいよ。聞こえるわよ』って。『何がです』とぼくが聞くと、『まあ、いいからやってみなさい。』

石を拾って、耳にあてるのよ。ほら』と、お姉さんは、手に持っている石をぼくに渡した。その腕がとつても細いのでびっくりした。ぼくはいわれたように耳にあててみた。『目を閉じてじいっと聞くのよ。石をね』と。そのとおりにした。『ほら、聞こえるでしょう』。『波の音ですか』とぼくはきいた。『ちがうわよ。ほら、ちゃんと聞かなくちゃ』。ぼくは、耳を澄ませた。波の音、風の音、バイパスを通る車の音、人の声が聞こえた」

和尚は目を閉じていままさに聞いているようにする。

「それで、お姉さんはいったんだ。『ほら、聞こえるでしょう。石が話すのよ』。『石がですか?』ぼくにはお姉さんのいった意味がわからなかった。ぼくは目をあけた。伊藤さんと目があつた。伊藤さんは、ちよつとだけほえんだ。お姉さんは石に耳をあてて目を閉じている。『ねっ。聞こえるでしょう。石の声が。ほら』。ぼくは正直にいった。『いえ、ぼくには』。『太郎さんは聞こえない? 加奈はどうなの?』伊藤さんはちよつと困つたように『えっ、ええ』と答えた。『そう、二人ともだめなの?』と、お姉さんが目をあけた。『二人

とも聞こえないの。私には聞こえるんだけど。太郎さん、この石ならどう？』と、お姉さんはぼくの手のひらに石を落としてくれた。あたたかかった。でも、耳にあてても波の音が聞こえるばかりだった。『石はね、昔のことを話してくれるのよ。この石がみたり聞いたりしたことを話してくれるのよ。遠い遠い昔のことも、つい昨日のことも。石が覚えていることなら、なんでも話してくれるのよ。ほら、聞こえるでしょう』。ぼくには波の音しか聞こえなかったし、石のあたたかさばかりが強く感じられた」

和尚は話がじょうずだ。うらやましいくらいに感じる。

「お姉さんはいった。『石にもいろんな石があつてね、さきやくように語つてくれる石もあれば、楽しく笑い声を聞かせてくれる石もあれば、悲しく歌う石もあるのよ。そう、歌う石もあるのよ。そんな石を拾えたらその日は幸せね。悲しい日には悲しく歌う石がいいわ。うれしいことがあつた日には陽気に歌う石がいいようにね』。ぼくには声も歌も聞こえなかった。『今日はどっちの石かしら。太郎さんに会ったから、やっぱり陽気に歌う石のほうよね。』

ぜったい』。石の声は聞こえなくても、お姉さんの声をぼくは一生懸命に聞いた。『私が死んでもね、きつと、石は私のこと覚えていて、話してくれるわよ。太郎さんも、加奈もね、三人でこうしている今日の日のことを、この浜辺のどれかの石が、話してくれるわよ』。そんなふうにお姉さんはいったんだ」

和尚は涙声だ。

「ごめん。モッポ。ぼく帰るよ」

和尚はふいと走って行ってしまふ。

**ぼく**は浜から離れる。

おきてから牛乳一杯だけで、おなががすいてきたけれど、すぐに帰る気がおこらない。

行き当たりばったりで歩いて行くと、胸のあたりに、不意にあの味がして、ぞつとこわくなる。

東京の街をあてどなく歩いていたころと似たあの味だ。

——いけない。

この味が強くなつていったら、その次には、あの感覚だ。

腕を振つて、昔の記憶を振り払おうとする。東京のことは忘れてしまいたい。すべてなかったことにしてしまいたい。だから、東京から逃げてきたんだ。なのに、この味だ。

ここでまただめだったら、ぼくはどうなつてしまうんだ。

——ちきしょう！

やっと叔父さんのところがみつかったんだ。ここでは、ぼくはふつうの子と同じように学校に行くんだ。この二週間を懸命にがんばってきた。

それなのにこの味だ。その先にあの感覚があつて、そして東京湾に飛び込もうとするんだ。

ぼくは和尚のようにかける。

走ると、あの日、車道を無理やり渡ったときのことかよみがえってくる。

姉の背中に「ばいばい」といってこの町に逃げてきた。あのまま東京にい

たら、四月になってからも学校には一日だって行ってないだろう。もしかしたら、もう生きていなかったかもしれない。電車を降りて、叔父さんの顔を見て、ほんとうにほっとした。

見覚えのある角に出る。

——そうだ、ここを曲がったんだ。

この町にカバンひとつだけをもってきた日に、駅から叔父さんに連れられてここで曲がった。急な坂道があつて、高台に連れて行つてくれて、この町の様子をみせてくれた。東京とはまるでちがつていた。東海道の松並木よりも高い建物はなくて、春の日差しがやわらかく降り注いでいた。ここでなら、すべてがすっかり変わってくれるとそのときに思った。

——ただ、そうはなっていない。いろいろと変わったこともあるけれど、この味はそのままで。

——どうしてぼくはいつもこうなのだろう。ほかの人はみんなふつうに学校に通っているのに、ぼくだけがどうしてちがうのだろう。

「ちきしょう！」



「ふつうの花のくせして、そんなにきどるなよ」

前のほうで声をする。聞いたことのあるような声だ。

「そばにこないでよ。汚いものをかけたりしたら、承知しないよ」

別の声をする。

石垣の下の陽だまりにメアリーがいる。

「おいらは、そんな品の悪いことはしないよ、紳士だからね。おいらは、ただ、タンポポくんよ、きみとの会話を楽しみたいと思っただけなんだ、紳士と淑女のね」

「会話？ いらないわよ。この上天気につっかく花をいっぱい咲かせているのに、邪魔しないで」

「おいらもこの上天気が好きだ。だから、よりいっそう気分をよくしようと、きみと会話をしたいと思っっている」

空はすっかり晴れ上がった。

「結構です。だまっているほうがよっぽどいいわよ」

「それは誤った思い込み。だまっていることはいつだってできるのだから、会話することがどんなに楽しいか、ためしてみるのも一興ではないかな」

「一興だなんて、難しいことばを使って、野良ネコのくせに」

「そうだな、おいらは野良ネコだ。だからこの陽だまりでこうしてすわっていられる。ほら、あそこに、不景気な顔をした人間がいるだろう。かわいそうに、野良人間にもなれないから、あんな顔しているんだな」

「ほんと！ 暗い顔ね。ああいう子は、気をつけたほうがいいわよね。急に道端の花を踏んづけたり、ひっこ抜いたり、野良ネコを蹴ったりするかもしれないから」

「そんなことしないよ」

と、ぼくはいう。

「ほう、おいらたちのいうことが聞こえたのか」



「まあ、めずらしい」

「ここにすわりなよ。あつたかいからよ、遠慮はいらない」

と、メアリーが手招きする。

「いいよ、メアリーと並んで日向ぼっこなんてしたら、恥ずかしいよ」

「きなよ。タンポポくんとのお話がちょうどいいぐあいにはずみかけていたところなんだ」

「あたしは会話なんかしていないわよ。したければ、この暗いにいさんとどうぞ勝手になさい」

「にいさんが素直にすわらないから、機嫌を損ねてしまったじゃないか」

「ぼくのせいじゃないよ」

「そうやってみんな口をとんがらかせていたのでは、会話を楽しむことなかできないな。会話には会話のマナーというものがある。紳士淑女諸君！」

「そのとおりよね、△会話のマナーを心得えていないのは、あたしの知る限り、その野良ネコちゃんだけよね」

「野良、野良いうけど、そういうタンポポくんも雑草、野良草じゃないか。野良ネコに野良草に野良人間と、きれいに野良が三つそろったものだ」

「ぼくは野良かなあ？」

「そうそう、きみは、残念ながら、まだ野良になりきれしていない。住まなければならぬところがあるものな」

「あたしは、ちゃんと生える場所に生えているんで、野良じゃありませんからね」

「ほう、生える場所って、このことかい」

「そうよ」

「ここなら、おいらもここにいます。たまたまだけだな」

「それは、あんたはたまたまよ。うろうろほっつき歩いている野良ネコだもの」

「タンポポくんも、たまたまここに生えているんだろう。ふわふわとタネが飛んできて、たまたまここに落ちたものだから、ここに生えて、花を咲かせ

ているわけだ。ただの偶然だね」

「ちがうわ。ここがあたしの生える場所、ここがあたしが花を咲かせる場所。だから、タネがここにきて、ここで芽を出したのよ」

「風の加減がちよつとでもちがっていたら、タネは別のところに行ってしまう、そこがコンクリートの上だったら、そのまま干からびて終わりだったろうし、水に流されたら、泥に埋まってしまっただろうし、いまごろ花なんか咲かせていないだろう。まったくの偶然だね」

「やっぱりあんたは野良ネコね。ふらふらとあてのない暮らしをしているから、そんなふうに考えるのよね。あたしはね、ここが生える場所だからここにいるのよ」

「タンポポくんは頑固だな。だって、綿毛が飛んだ日の天気がちよつとでもちがっていたら、きみのタネは別のところに飛んで行っただろうし、そのときは、ほかのタネがここにきて、別の花が咲いたんじゃないのかい。タンポポくんよ、それでも、その花がきみなのかほかの花なのかは、おいらたちに

はわからないな。タンポポはみんなおんなじだから」

「あたしはほかのタンポポとはちがうわ」

「ほかのタンポポもやっぱり同じようにいうだろうな」

「ここはあたし以外のタンポポは生えないの。だって、よくみなさいよ。ここで花を咲かせているのはあたしよ。こんな単純なことがどうしてわからないのかしらねえ。野良ネコには難しすぎるのかしら。そののにいさんはどう思うかしら？」

「ぼく？ よくわからないけど、タンポポってみんなおんなじだと思っ  
ていました」

「それをいうなら、野良ネコはみんな同じ。野良人間もみんな同じよ。あ  
しからみれば、みんなふらふらと居場所なく動いているだけの存在ね」

「まあ、どうだな。おいらはとびっきりの紳士で、あくまでも豊かな会話を  
楽しみたいのであるからして、タンポポくんの言い分も認めるのはやぶさか  
ではない」

「また難しいいいまわしをして、意味がわかっているのかしら。意味不明のことを並べていないで、それこそ、風に吹かれて、どっかに行つてしまいなさいよ。今日のこの光、いましかないこの日光にあたつて、めいっぱい花を咲かせているのですから、もう邪魔しないで」

タンポポがいうと、

「なんだかんだと理屈をこねても、無駄なことさ」

と、上から声がする。

「だれだい？ 楽しい会話にいきなり割り込んでくるのは」

メアリーは見上げ、電線にとまっているカラスをみつけ、

「なんだ、おまえか。おまえこそ、この前、変な理屈をこねていたじゃないか」

「そうさ。とても悲しかったからね」

「カラスのくせに悲しいことなんかあるもんか。おいらなんかは、箱の中で一生分の悲しみを味わったから、悲しさなんかもう心のどこにも残っていない

いな」

「それは幸せだね」

「ふん、幸せだと。気色悪いことをいつてくれるな。幸せということばがこの世に万一存在できるとしたら、せいぜいこのタンポポくんくらいだろうな、それを使えるのは」

「もちろん、あたしは幸せよ。春の日を受けて、花を咲かせて、幸せでないってことがあるかしら。今この幸せはあたしにある。そんな大事なときをみんなで邪魔しないでほしいわ」

「あーあ、どこまでいってもおいらとタンポポくんとは合わないな。だからこそ会話が稔りあるものになる」

「合わなくて結構！ 会話もなくて結構！ ほんと迷惑だわ。さようなら」  
タンポポはきつぱりという。

「タンポポくんにやられたね。悲しみも幸せも理屈でどうなるものではない  
ついでに」

と、カラス。

「どっちも偶然だからな。それはわかるさ。しかし、おいらはあくまでも知性派の紳士でいたいと思っっている。タンポポくんとカラスくんとも、今朝はどうやらい会話ができそうにないので、どっかよそに行くとするか」

メアリーはのっそり歩き出す。

ぼくはいう。

「ねえ、ブツトでしょう?」

「ああ、おれだ。あれからさ、悲しさから逃れようとしてあれこれ考えたけど、無駄だった。カラスは翼で考えるって自分でいったのに、少しもできていなかったのを思い知らされたよ」

「そうだったんだ」

「翼の力で考えるってことを、もう一回よくみなおさなければと思っっているんだ」

「へえ、そうなんだ。よくわからないけど」

「モツボもたぶんわかるようになるさ」

「そうなの？」

「おれといっしょに試してみるかい？」

「ぼくには翼がないけど」

「さあ、立って！」

ブツトの掛け声でぼくは立つ。

「よし、坂の下のほうに向いて！」

いわれたとおりにする。

ブツトは、電線から離れふわりとぼく目の前におりてきて、

「さあ、こい！」

翼でぼくを誘う。

ブツトは地面すれすれのところを飛び、ぼくはその後を追って走り出す。

ブツトはスピードをあげる。ぼくも速くなる。ブツトは翼を傾けてカーブ

を曲がる。ぼくもからだを傾けて曲がる。ブツトもぼくもますます速くなる。



さっきの坂の入り口の角にきてもブットは飛び続け、ぼくは追いかける。ブットは東海道線のガード下のトンネルに飛び込む。ぼくも飛び込む。

外に出ると、ブットはいない。

前にも右にも左にも上にもブットはいない。

止まると、急にぜいぜいと息が苦しくなる。下を向いて胸を抑えると、ポケットに叔父さんの手紙がある。

——どうしよう？

ここで破り捨ててしまえば、親父はぼくの居場所を知らずにいるのか。

親父のやつはきつと何も知らないのだろう。だって、ぼくが東京でどんなに大変だったかもぜんぜん知らなかった。知ろうともしなかった。

叔父さんはどうしてこの手紙をぼくに渡したのだろう。ぼくにだまって知らせることだってできたはずだ。それなのに、手紙を書いて、わざわざぼくに投函してくれといった。

捨てなければ捨ててしまっていないということなのか。

「ちきしょう」

ぼくは封筒を取り出す。宛名をみて、ぎゅうつと握りしめる。

福岡の親父のところに行こうと考えたこともあった。死ぬよりはましだろうし、あの人よりもずっといいだろうと思っただからだ。

だけど、あんな親父のところなんかには、行くはずがない。どんな風が吹いても、タンポポだって行くはずがない。

遠くでカラスが鳴く。

——そうだ、自転車が置きっぱなしだった。

ぼくは思い出し、国道のほうに行く。

ポストがある。ぐちゃぐちゃになった封筒を、そのまま押し込む。

これは叔父さんの手紙だ。ぼくには関係がない。

## 第四回 クロマ・ツルマ

これで三度目だ。月曜、水曜、金曜と一日おきに、必ずギヤスリン堀内の時間だ。

英語の先生はみんなからギヤスリンと呼ばれている。いくらか正確に書くとギヤスリンだ。ギヤスリンは外来語も正しく発音しようとする。日本語でしゃべっているときにだ。平坦にガソリンなどとは絶対にいわない。ギヤスリンとかギヤスとかいう。テニス部の顧問をしていてテニスとはいわない。テナスクラブだ。クラブの「ラ」は、当然、Lの発音だ。コンピュータウイルスはヴァイアラスだし、おかしいのは、一キロメートルは「いち」キラミターということだ。どうせならワンキーラミターといってほしいものだ。

そのギヤスリンの時間にこれで三度目。最初は月曜日だった。

三日曜日というのは、伊藤さんが初めてきていて、びっくりした日だ。その伊藤さんに向かって、ギヤスリンは、お得意の「しっかりしなさい」をさっそく食らわした。

ギヤスリンの授業はしよっちゅう生徒を指すから気が抜けない。突然、「ミスター・タロー」とか呼んだりする。ただ、タローはぼくと和尚の二人いることに気づいたので、ミスター・タローはすぐに使わなくなった。

「ミズ・イットウ。返事をしなさい」。

ギヤスリンは、トントンと伊藤さんの机をたたいて、

「あなたね、二回も三回も呼ばせてはだめ。たしかに、いろいろたいへんだったことはわかるけれども、いまはレッスンの時間なので、ちゃんと集中して」

もう一度、机をたたいて、

「しっかりしなさい」

といった。

月曜日の英語の時間は抜き打ちテストから始まった。十五分間のテストだ。それが終わって間もなくのところに、奇妙なことが始まった。

いつものようにぼくは窓の外をみていた。ぼくは窓際の前から二番目にすわっている。その二つ後ろが伊藤さんで、同じ列の一番後ろが和尚だ。

教室は二階にあつて、窓の下は校庭、校庭の向こうに松林がある。松林は東西に長く延びていて、その先にバイパスが走っている。バイパスは松林よりも海側に一段下がったところにあるから教室からはみえないのだけれど、自動車の通る音はいつも低く聞こえている。

窓から外に出られたらいいのにと、このときも思っていた。好きなときに好きなように窓から外に出る。先生にばれないように、からだは教室のなかにちゃんとある。ところが自由に外に出て行って、空を飛ぶんだ。

最初は遠くの雲かと思つた。松林の上に、黒っぽいぼんやりとしたかたまりのようなものがあつた。でも、空はよく晴れていたから、雲にしてはなん

となく変な感じがした。

目を凝らすと、輪郭のはつきりしないふわふわした感じのものが、ゆつくりと回転しているようだった。ちよっぴりだけ縮んだり、ちよっぴりだけふくらんだりもしている。

それは遠くではなくて、松林の上にあった。右にころがって行ったり、左にころがって行ったりして、しばらくそんなことをしているうちに、いきなり、ぴよんと、まっすぐに上にはねあがった。

「あっ」

と、ぼくは声に出しそうになった。

はねあがって、松林の上を、一度、二度、三度とはずんだ。はずみがおさまると、もう一度、ぴよんと上にはねあがった。さつきよりちよつと高かった。ほわほわと四回はずんで、また松林の上をころがり始めた。

どんどん左のほうへところがって行くので、ぼくはだんだんと首を曲げ、これ以上みるためには、からだを動かして後ろに向かないとだめになった。

そのときに、

「ミズ・イットウ。返事をしなさい」。

とギヤスリンがいったのだ。

ぼくも身を縮め、伊藤さんが叱られ、先生が教壇にもどると、ぼくはまたそつと窓の外をみた。そこにはもう何もなかった。

ぼくは、伊藤さんも同じものをみていたのではないかと思った。

その日、伊藤さんは、クラスの友だちからいろいろ声をかけられていたようだけれども、あまり元氣そうではなかった。

ぼくは離れたところから、気付かれないようにみているだけだった。

**次**が水曜日だった。その日はギヤスリンの授業は月曜のテストを返すことから始まった。

「点数の高い順に呼びますから、取りにきなさい」

ぎよつとしたけれど、これがギヤスリンの流儀のようだった。

伊藤さんは五番目くらいだった。和尚はまん中よりあとくらい。ぼくはその三番後だった。最後が加藤さんだ。

「ミズ・マリー。どうしました、全部、ブランクではありませんか？」  
ギヤスリンは空白のままの回答紙を振り回した。加藤さんは斜めに先生を見上げた。

「簡単なイグザムですよ。ほんとうに。最低でも六十点です。あなただけ白紙」

加藤さんは回答用紙を二本指でつまむと、ぐいとひったくり、くるつと横を向いた。

もちろんここで得意のせりふだ。

「ミズ・マリー。しっかりしなさい。しっかり勉強なさい。しっかり」  
加藤さんは、

「いやです」

と、つぶやいた。小さい声だったけれど、ぼくの耳に聞こえたし、ギヤス



リンも聞いた。

先生は、トンと机をたたいた。

「ミズ・マイイ。なぜ勉強をするのかご存知ですか」

加藤さんは、

「知りません」

と、ぶつきらぼうにいった。

「中学二年でしょう。勉強の意味も知らないのですか」

「知りたくありません」

加藤さんは顔を真っ直ぐギヤスリンに向けてはつきりとした声でいった。

**ぼく**は、あの人のことを思い出した。それは去年の十月だった。

二学期になって少しするとうとうぼくはまるつきり学校に行かなくなつて、あの人は学校から呼び出された。ぼくはそんなこととは知らずに、いつものように、適当に時間を見計らつて家に帰り、カギ穴にカギをつっこんだ。

カギはかかっていたいなかった。姉が先に帰ったのだろうかと中にはいると、玄関にあの人のクツがあった。左右にとびちってばらばらに。いやな予感がした。

「ただいま」

と小声でさぐってみた。

リビングから、

「今日、あなたの学校に行ってきたわよ」

甲高い声がかえってきた。開け放たれたドアからのぞくと、あの人は、食卓に両ひじをつけて、その上にあごをのせ、ぼくの顔をみた。ずっとそのかっこうで待っていたのだろうか。

「あなた、今日、どこに行ってたの？」

「学校だよ」。

あの人はテーブルをたたいた。

「うそおっしゃい」。

「うそじゃないよ」。

うそに決まっているのだけど。

「知らなかったわよ。まさか」

声がかすれていた。

「どうしてなの？」

と、あの人はいった。

ぼくは、むっとした。

「どうしてなのよ」

あの人はくりかえした。

「知らない」

小さく答えた。

「私、とっても恥ずかしかったわ。何も知らなかったから」

ぼくは、またむっとした。

「明日から行くよ」

つぶやくようにいった。

「きつと、そうしてちょうだいね」

その翌日も学校には行かなかった。

ぼくはあの人に、加藤さんのようにはつきりとものをいうことができなかつた。

**ギ**ヤスリンは両手をあげていった。

「この際、大切なことですからみなさんにいっておきます。ミズ・マーイ、あなたは、すわっていいです」

加藤さんは廊下側の一番前の席だ。加藤さんは、英語だけではなく、どの時間のどの先生の質問にも、「わかりません」「答えられません」「読めません」と返事をする。

「試験でいい点をとるために勉強するのだと思ったら、それはたいへんな間違いです」

と、ギヤスリンはいった。あの人と同じだ。

「いい高校にはいるためでも、いい大学にはいるためでもありません。そんなのは目先のことです。人の一生は長いのです。あなたたちの一生は、高校にはいるためにあるのではなく、大学にはいるためにあるのでもありません。その後のほうがずっと長いのです。その長い人生をよりよく生きるために勉強があるのです。いいですか、これからの長い将来のために、勉強する必要があります。よく勉強すればその結果として、試験でいい点をとったり、受験に合格したりするでしょうけど、それは勉強のもたらす一時的な結果でしかありません。勉強の目的ではないのです。この小さなエグザムはよく勉強しているかどうかをみたり、勉強したことを自分に定着させたりするためのものです、これでいい点を取ることが大事なのではないのです。ミズ・マイ、いいですか、ちゃんと答えを書いてください。あなたは本来、よくできる人なので、すから。そうでしょう。いいですか、わかりましたか」

ギヤスリンにしてはやさしい口調になっていった。

でも、加藤さんは即座に、「わかりたくありません」と、こたえた。

ギヤスリンは教壇をドンとたたいた。顔色が変わった。

しかし、すぐに、

「レッスンを続けましょう。いまは英語の時間ですから」

と、低い声でいい、授業は再開された。

**そ**の加藤さんと、先週、初めて話をした。

昼休みは大の苦手だ。一人でどうやって過ごしたらいいのかわからない。

和尚は友だちが大勢いて、いつもだれかといっしょにいるので、悪いような気がして近づけない。

それで、図書室に行くのを思いついた。先週の火曜日だ。図書室には、八人くらいがすわれる大きなテーブルがひとつと、窓がわに一人ずつの机が五

つある。

はいって行くと、大きなテーブルのすみっこに加藤さんがいた。その斜め前の、テーブルの中央で、頭のはげた先生が弁当を食べていた。

ぼくは書棚から適当に本を選んで、先生の斜め前に、加藤さんと同じ側の一番離れたすみに静かにすわった。

別に読みたかったわけではないけれど、本がないと格好がつかないので持ってきただけだった。開きながら先生の様子をちらっとみた。

先生は弁当を食べ終え、ごそごそと新聞紙でくるんでカバンに入れると、小さく折られたんだ別の新聞を取り出して読み始めた。それは漢字だらけで、中国語のようだった。

加藤さんはもの音ひとつたてずに本を読んでいた。

三人とも口をきかずに昼休みは終わった。それが居心地がよく思えて、昼休みのたびに行くようになった。

先週の金曜日のこと、先生は弁当を食べ終わると、ぼそっと口を開いた。

「常連さんが一人ふえたわけだ」

ぼくをみて、にたつと笑った。

加藤さんが、

「同じクラスの山本くんです。山本太郎くんです」

と、本から目を上げずにいった。

「はい。二年B組の山本です」

ぼくは先生にあいさつした。

「ぼくは社会科の本所だ。だけどぼくのことを本所先生と呼ぶ生徒はいない。

ハゲポンと呼んでいる」

くすつと加藤さんが笑った。やはり本を読みながらだ。

先生は、

「好きではげたわけではない」

と、頭のとっぺんをぼんとたたき、

「いまは一年と三年の社会科を教えている。ちやうど諸君らとは関係がない



わけだ。きみらには幸いなことだな。まあ、よろしく。

先生が深々と頭をさげ、ぼくも頭をさげた。

「そうだ、ひとつだけ注意しておこう。大事なことだ。この図書室では決して飲食をしてはいけないんだ。絶対にだめだぞ」

先生は弁当箱を新聞紙でくるんでがちゃがちゃとカバンにしまった。

「ははは、ぼくは例外だ。そこをみなさい」

先生は入り口に掲げてある図書室利用の注意事項を指さした。

「三番目に、図書室内では飲食をしないこと、と書いてある。だけど、その脇に、小さな字で、ただしハゲポンは除く、としてある」。

先生は大きな声で笑った。ぼくはつられて笑った。

「しっー」。

先生は、指で口をおさえ、

「注意事項の最初は、図書室内では静粛にすること、だ。笑ったりしてはいかないのだ」。

加藤さんと口をきいたというのはいくつということだ。

**ギ**ャスリンが加藤さんに説教した後で、ぼくはいつものように窓の外をみていた。

松林の上に、黒いものがまた現れた。あのとときと同じふわふわとしたものだが、こんどは二つだった。

一つは右まわりに、もう一つは左まわりに、縮んだりふくらんだりしながら回転していた。二つが同時にぴよんと上にとんで、二度、三度とはずんだ。それがおさまると、また、ぴよんととんで、数回はずんでから、左右に別れてころがり出した。ころころと松林の上をころがって、両方ともぼくの視界からはみだした。

みえなくなってしまうので、しばらくはギャスリンの声を仕方なく聞いていた。

数分後、ふわふわと左側のものがもどってきた。すると右側からももどつ

てきて、ころころと二つが近づき、ぴよんとはねあがり、はずみながらすれちがいで、右と左に別れた。そして視界からまた消えた。

しばらく待つと、今度は三つになった。三つがぴよんぴよんとはねて飛び交い、互いにじゃれあうようにしている。だんだんと、動きが激しくなった。

「ミスター・シマザキ、立ちなさい」

ギヤスリンの声がした。返事がなかった。

つかつかと、ぼくの脇を先生は通って行き、

「ミスター・シマザキ、スタンダップ！」

ギヤスリンは甲高い声でいった。

「はい」

ようやく和尚が返事をした。

そのときに和尚も同じものをみていたのではないかと思った。

「はい、何でしょうか？」

「何でしょうかですって？ 三回目ですよ。十四ページの七行目から読みな

さいといったのを聞いていなかったのですか？ どうしたのです？」

先生はまたいらだってきた。

「いまはレッスンの大事な時間です。たった五十分間のレッスンですよ。そのくらいの集中ができないのですか。さっきいったばかりではないですか。勉強の大切さがどうしてわからないのです。もう一度いみましょうか。なぜ勉強するのか。皆さんの人生のためなんです。いいですか、どの科目もそうだけど、とくに英語は、これからどんな人にもきつと必要になるものなのです」

ギヤスリンはぐるっと生徒を見回し、

「おどかすわけじゃないけれど、これからの社会はどんどん競争が厳しくなるのです。試験の点がいいとか悪いとかいうのが競争だと思ったら、それはちがいます。試験なんて、社会での競争に比べたら、ずっと甘いものです。いいですか。みなさんは今は親に保護されて、学校に保護されているから気がつかないかもしれませんが、世の中の競争は厳しいのです。それが、もっ

ともっと厳しくなっていくのです。競争に負けてはいけません。負けたなら、よりよい人生を送るなどということはできません。競争に負けないためには、これからは、英語が絶対に必要です」

——絶対か。

ぼくは窓の外に視線を送った。黒いものはなかった。

ギヤスリンは止まらなくなった。

「なぜなら、ここが大事なのですが、これからの競争は、日本の中だけの競争ではないからです。世界中が競争です。日本は先進国とかいっていても、うかうかしていたら、あつという間に転落してしまいます。皆さんのような若い人が、のんびりしていたら、もうだめなのです。日本が世界のなかで負ければ、日本の中で勝つても負けても、みんながひどくみじめな目にあうことになります。いまならまだ日本の中で負けたって、そこそこの目にあうでしょう。フリーターになればいいやなんて、みなさんの中には思っている人もいるかもしれませんが、いまはなんとか暮らしていても、日本全体が

沈没したら、そんなことはいつていられなくなります。学校の成績ではないのです。私がいっているのは。英語の勉強が将来の日本を決め、あなたがたの暮らしを決めるのです。いいですか、しっかりしなさい」

ギヤスリンは声を張り上げながら教室をくまなくまわり、また和尚の席の脇にもどった。

「ミスター・シマザキ、ユーの家はお寺だから、英語なんか関係ないと思っているんじゃないのですか。だめですよ、そんなことでは。お経を昔から同じように読んでいればいいなんてことでは、これからのお寺だって通用しないはず。しっかりしなさい。さあ、読んで」

ギヤスリンはトンと和尚の机をたたいた。

「はい」

和尚は教科書を両手に持ち、腕をまっすぐぴんと伸ばして、

「うほほん」

と、咳払いをした。そして、読み出した。

「ニジ、ブツゴウチヨウロウシヤリホツ、ジユウゼザイホウ、カジユウマン  
ノクブツド、ウセカイ」

大音声でお経を唱えたのだ。

ドンドン

お経に負けない大ききで、ギヤスリンは机をたたいた。

「やめなさい。ミスター・シマザキ。ドントシャウト！」

和尚はだまった。

「いいです、ミスター・シマザキ、ユーは、今日のレッスンを受けなくて。  
教室の外に出ていなさい」

「はい、わかりました」

和尚は教室から出て行くとした。

そこでちょうどチャイムが鳴って、授業は終わった。

これが水曜にあったことだ。

そして、今日の金曜日だ。

　　またもギヤスリンの時間に松林の上に現れる。ころころところがっている。三つある。右に左に、はねたり、ころがったり、松林の上で動いている。ふわふわとやわらかそうな感じで、ぴよんとはねると、松林がそれをやわらかく受け止め、ぽよんぽよんとはずむ。三つがとんだりはねたり、じゃれあうようにしている。

——楽しそうだな。

　　ぽよんぽよんとはずみ、ころころところがる。大空の下で、ああやってころがったりはねたりできたなら、楽しいだろうな、とぼくは思う。

「想像していたとおり、楽しいだろう」

「えっ？」

　　返事をするぼくは濃い緑色のほかほかしたマットの上にいる。

「ほら、はずんでごらんよ」

　　聞いたことのある声だ。



「はずむって。どうするの?」

「はずむんだよ。ちよつとからだを縮めて、それからふくらまして、そして、はずもうと思えばいいのさ」

「でも、どうやってからだを縮めるの?」

「だから、縮めようと思えばいい」

「ふうん」

からだを小さくしようと思う。縮んだような気がする。そしてふくらもうとする。ふくらんだ感じがする。よし、はずもうと思う。そしたら、からだは少しだけ上にはねる。ぽんと下に落ちる。緑のマットはやわらかくて、ぽよぽよとははずむ。

「うまいじゃないか」

「そう?」

「いいよ、それで」

「ほんと?」

もう一度、はずもうと思う。ぴよんとからだはねる。

「いいぞ、いいぞ。でも、ちよつと、おそろおそろって感じじゃないかな。それでもいいんだけど、もっと、本気になって、はずもうと思うんだ」

「そうなの？」

よし、はずもうと、強く思ってみる。そしたら、ぴよんと、からだは、さつきよりも高くはねる。そして、マットに当たって、ぽよんぽよんとからだが大きくはねる。

「ははは、いいぞ、いいぞ。初めてにしてはいいぞ。うまいじゃないか」

「そうかなあ」

「こんどはからだをまわしてみよう」

「うん。でも待って」

ぼくは、話しかけてくる声に、

「わかったよ、やっぱりそうだよ。ブツトだよね」

「あはははは」

間違いなくブツトの声そのものだ。

「そうか、ブツトか。じゃあ、ぼくはどうしたんだろう。きみと同じカラスになったのかなあ」

「ちがうよ。みなよ。翼がないだろう」

その通り、翼はなくて、ただ黒いふわふわとした丸いからだがある。

「ほんとうだね。じゃあ、これはなんなのだろう」

「クロマ・ツルマだよ」

「えっ？」

「クロマ・ツルマ。知らないのも無理はない。黒松林の上にしかないからね」

「ふうん」

別のクロマ・ツルマがやってくる。ころころとはずむにように近づいてくる。

「ああ、楽しい。あんまり楽しいんで、おなかの底から笑いたくなってき

やった」

「そうだろう。だったら、笑ったらいいのさ」

「そうか。楽しいんだから、笑えばいいんだよね」

「あつたりまえさ」

「あたりまえか。そうなんだ。よし、楽しい！ ははははは」と、笑う。

笑いながらそのクロマ・ツルマはころがって行く。

「ほら、モツボもころがってみなよ」

「どうするの？」

「ころがろうと思えばいいだけだよ」

「ふうん」

右にころんとしようと思う。そしたら、右にころんと一回転する。からだ全体がやわらかくていい気持ちだ。

「ほら、うまくいった！ いいぞ、いいぞ」

「ほんとだ」

「さあ、もつところがつてみなよ」

「うん」

右に「ごろんごろん」と、思う。そしたら、ごろんごろんとこころがる。

「うまい、うまい」

よし、ごろんごろんごろんと思う。ごろんごろんごろんと、こころがる。

「はははは」

笑い声もどつてくる。

「あつちのはじつこまで行つてきちやつた」

「松林から落ちると、痛いから、それだけは気をつけなよ」

「わたし、運動神経がいいことくらい、山田くん、よく知っているよね」

「そりゃそうだ。プールだつて、加奈ちゃんは、すぐに泳げるようになった

ものね。しかも、上手に速く」

「そうよ、体育で、山田くんに負けたことなんかなかったんだから」

——加奈ちゃん？ わかった、伊藤さんだ。

「はははは」

伊藤さんは笑いながらころがって行く。

ぼくは、ごろごろところがる。とても気持ちがいい。たしかに伊藤さんのように笑いたくなってくる。

「へへ」

と、笑ってみる。

「だんだん上手になってくるね」

と、ブツトがいう。

「いいね、これって。気持ちいい。でも、ぼくは、どうなっちゃったんだろう。クロマ・ツルマって、乗り物？」

「乗り物？ ちがうよ。だって、乗っているわけじゃないだろう」

「そうだね。だったら、クロマ・ツルマのぬいぐるみを着ているのかな？」

「そんなところかな。でも、ちよっとちがうな」

今度は、左にぐるぐるまわってみる。まわると楽しくなってきた、笑いたくなる。

「くく」

ぐるぐるぐる、そこらをひとまわりしてもどつてくる。

「このクロマ・ツルマって、生き物なのかなあ。ぼくはクロマ・ツルマのからだの中にはいりこんでいるのかなあ」

「そんなところかな。でも、ちよつとちがうな」

「ブットのいうことって、わかんないなあ」

「どういったらいいのかなあ。ほら、あっちの窓をみてごらんよ」

学校の建物がある。ぼくらのクラスの窓があつて、教室の中がみえる。一番後ろに和尚がいて、その三つ前に伊藤さんがいる。

「あつ、ぼくがいるよ！」

「そうさ、きみはあそこにいるのさ」

「でも、ぼくはここでブットと話をしている」

「そうさ。モッポはここでぼくと話をしている。それはそうさ」

「でも、あそこにもぼくがいる」

「そうだね。それでいいじゃないか。きみは山本太郎。中学二年生なのだから、当然、あそこにいるべきだよね」

「さつきまでは、あそこにはぼくはいたんだ。窓の外をみていた。でも、いま、ぼくはここでブットと話をしている。だとしたら、あそこにはぼくのからだだけが残っているということかな」

「そう思っても悪くはないかな。でも、やっぱりちがうな」

「はははは」

伊藤さんの笑い声もどつてくる。

「ああ、おかしい。私、こんなに笑ったのって、ほんとに久しぶり」

伊藤さんは笑いながら、そこらをびよんびよんとはねる。

「はははは、おかしい。おかしい。山田くんと、ほら、あるとき、箱根の山に行つたときのこと。あるときもおかしかった」



「あのときか、よく笑ったよ。加奈ちゃんは、ごろごろこころがりながら笑ってた」

「今と同じじゃない。はははは。わたし、思い出してきた」

伊藤さんの声は明るく楽しそうだ。

「わたしと山田くんと先にどんどん登って、だってみんなのろかったから、ずんずん二人だけで行ったら、急に見晴らしのいいところに出て、『よし、こだまを聞かせてやろう』って、山田くんが『ヤッホー』って叫んだ。でも、山はしーんとしていた。『じゃあ、もう一回』って、『ヤッホー』ときさつきよりも大きく叫んだ。でも、やっぱりしーんとしていた。それで『今度こそ』って、ものすごい大きな声で『ヤッホー』って叫んだでしょう。それでも、しーんとしていた」

「うん」

『じゃあ、こんどは、わたしの番ね』と、『ヤッホー』ってやってみたら、ちよつとして『ヤッホー』ってこだまがかえってきた。『やったあ』って、わ

たしが手をたたいて喜んだら、山田くんは、『ちきしょう』って、また『ヤッホー』と叫んだ。でもこだまは返ってこなかった。それで、またわたしが『ヤッホー』と叫んだら、ちゃんと『ヤッホー』ってもどってくる。山田くんがやるとどうしても静かなままなので、わたし、おかしくってゲラゲラ笑った。そしたら、くやしがつて『ちきしょう』って叫んだでしょう。すごい大きな声だったけど、それでもこだまは返ってこなかった。それで、わたしが『山田の、ちつきしよおう』って叫んだら、そのまま、『山田の、ちつきしよおう』って、こだまが返ってきた。あんまりおかしいんで、もうゲラゲラ笑って、そこらをころげまわって笑っていたら、向こうの草むらから、ぽこって、おねえちゃんが出てきたのよね」

伊藤さんは笑いながら、またころがつて行く。ぼくは、ふと、悲しくなる。

「だめだよ、そんなふうになったら。クロマ・ツルマはころがつているときは、楽しいという気持ちしか持たないんだから」

と、ブツトがいう。

「ブットはぼくが思ったことを知ったのだらうか。」

「でも、からだはクロマ・ツルマでも、こころはぼくだもの」

「ううん、ちがうね。クロマ・ツルマのときは、こころもからだもクロマ・ツルマだよ」

「いまはからだはクロマ・ツルマでも、ぼくは山本太郎で、こころは山本太郎だと思っけどな」

「いやちがうって。からだはクロマ・ツルマで、こころもクロマ・ツルマで、きみはいまはクロマ・ツルマの山本太郎なんだよ」

「だって、ぼくは人間としての山本太郎だと思っっているよ。こころだけがここにきているんだよ」

「わからないかなあ。人間のモツボはあそこにいるじゃないか。ね、からだはクロマ・ツルマでこころは人間なんてことはありえないさ。こころとからだはいつもいっしょさ。でも、まだ、よくころがっていないから、モツボにはわからないのかもしれないな。もつともつと、よくころがつてみなよ」

「そうなのかなあ」

ブツトのいうことはなんだかわからなかったが、ころがるのが気持ちいいということだけはたしかだった。また回転してみようと思うと、教室の窓に大きく和尚の顔がみえた。

和尚の顔は大きい。教室の窓からはみだしそうだ。

窓から和尚の手がにゅつと出てくる。こっちに向かって、動かしている。おいでおいでをしているようだ。校舎全体が和尚の口になる。何かいっている。

「は・や・く！」

**ト**ントんと机をたたいている。ギヤスリンだ。

「はい」

ぼくは立ち上がる。

「ミスター・ヤマモト！ 四回、呼びましたよ。どうしたのです。はい、答

えて」

——何のこと？

ぼくはかたまってしまう。

「こんな簡単な質問がどうして答えられないのです。アンビリーバブルですね」

ぼくはだまっているよりない。

「どうしたのです。だまっていないで。まるつきりホープレスじゃないですか」

ギヤスリンはトントンと机をたたく。

「しっかりしなさい。いったいこのクラスはどうしたのですか」

がたつと、イスを引く音がした。

「先生！」

大きな声とともに和尚が立ち上がる。

「先生、ぼくは先生にさからう気はまったくありません。だけど、わかって

ほしいことがひとつあるのです」

「なんですか？」

「ぼくらは、先生にいわれるまでもなく、しっかりとしているのです。そのことをわかってほしいのです。ぼくらは、先生の目からすれば、まだ子どもで、頼りなくて、もっとしっかりとしなければならぬとみえるかもしれないのですが、ぼくらはぼくらとして、しっかりとしているのです」

「私だって、みんながいつもだらしなしいとっているわけではありません。しっかりとしていないときがあるから、そのときに、しっかりとしないというのです」

「しっかりとしないといってくださいるのはありがたいのです。だけど、どこかちがうんです。ぼくらのことをわかってほしいのです」

「わかっています。みなさんには将来があるのです。その将来を台なしにしてほしくないのです。私たちは、みなさんのこともわかっているし、みなさんの将来にどんなことが待っているのかもいくらかはわかっています。だから

ら、その将来への備えをしてほしいと思うのです。これからは厳しい競争社会になります。それがわかっていのに、もし私たちがみなさんにその備えをさせなかったら、大人として無責任です」

「勝手に未来を押し付けて」

と、加藤さんがつぶやく。

ぼくには、はつきりと聞こえなければ、和尚と向かい合っているギヤスリンには幸い聞こえなかったようだ。

ギヤスリンはだんだんと早口になる。

「みなさんは、将来、これからの人生をよりよく生きるために、いま、きちんと勉強したり、あるいは運動したり、たくさんのことをやる必要があるのです。それを、だらしなく、いい加減にやったのでは意味がありません。しっかりやらなければいけません。だから、私は、しっかりしなさいといっているのです。意味なく叱っているわけではありません。みんなの将来を思うからです」

「それもわかります。だけど、ぼくらは、将来のためにいまを生活しているのではないのです」

「では、なんのために生活しているというのです？」

「いまを生活するためにいまを生活しているのです」

「あなたがたは中学生です。これから大きくなって、大人になる。そのための成長過程にあるのです。勉強をし、からだを鍛えて、ちゃんとした大人になるために、いまがあるのです。将来のための準備のときです。いま、しっかりとそれをしておかないと、将来、きちんと生活することができません」

「先生、ちがいます。将来のためにぼくらはいまを生活しているのではないのです」

「ちがわないです。いま、大人のための準備をしておかないと、ろくな大人になれなくて、将来困ったことになる。だから、しっかりしなければいけないのです。こんなことがわからないのですか」

「将来、将来って、ぼくらの将来ってなんですか？」



「大人になって、よりよい人生を送ることです」

「その先は？」

「その先？」

「よりよい人生を送るその先はなんなのですか？」

「よりよい人生を送る、それは私たち一生のことです」

「ぼくはその先のことを聞いているのです」

「その先？ それは、ずっと先を考えれば、いずれは死がおとずれるでしょうね」

「そうですね、死です。将来に備えるためにいまがあるといつていったら、必ずだれにでもある将来の死に行き当たるはずですよ。だったら、死に備えることをしなければいけない。そうなりませんか」

「いまは英語の時間です。道徳や宗教の時間ではありません」

ギヤスリンはうんざりしたような声を出す。

それでも和尚は続ける。

「将来のためとっていたら、人間は必ず死ぬものですから、死のことを考えなければならなくなります。そして、将来のためにといまを使っていて、突然に、死が襲ってくるかもしれないのでいいのでしょうか。ぼくは、いまをいまのために、しっかりと生きたいと思っています。いま、ぼくらは、ぼくらとしての苦しみだつてあるのです。ぼくらはぼくらとして懸命に生きようとしているのです。そのことをわかってほしいのです。それだけです」

チャイムが鳴る。

ギヤスリンは教壇にもどる。トントンと机を何度かかかるとたたきながら、しばらく考えていた。

「ミスター・シマザキ。アイヴ・ガット・ユー。ユーのいいたいこともわかりました。私のいいたいこともあります。でも、私もよく考えてみます。きみたちもよく考えてください」

ギヤスリンは深く呼吸し、

「Today is the scholar of yesterday. 今日は昨日の生徒。明日のために今日があるのではなくて、明日のティーチャーになるような今日にするということです」

窓の外をみるとクロマ・ツルマがひとつだけある。ころころと、松林の上をまわって、ぴよんと大きくはねると、ぱつと翼が生えて、ばさばさと羽ばたくカラスになる。

カー。カラスはひと鳴きすると飛んで行ってしまふ。







































































